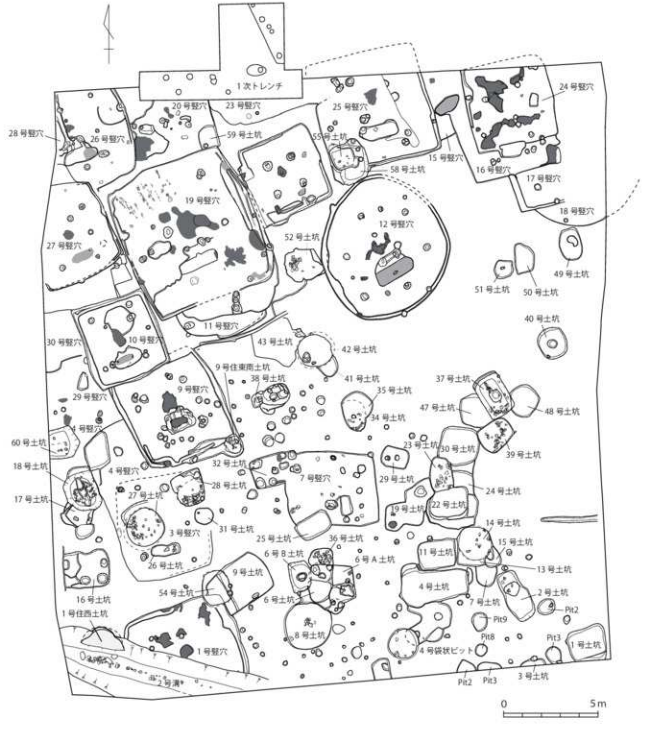
第８節　第７次調査

（１）調査の概要

台地の中央部やや南側、第１次調査区のすぐ南側約 928㎡を調査した。もっとも広い調査区である。検出された遺構は竪穴建物 24 基、土坑 62 基、溝一条である。



第198図　７次調査区遺構配置図

（２）遺構と遺物

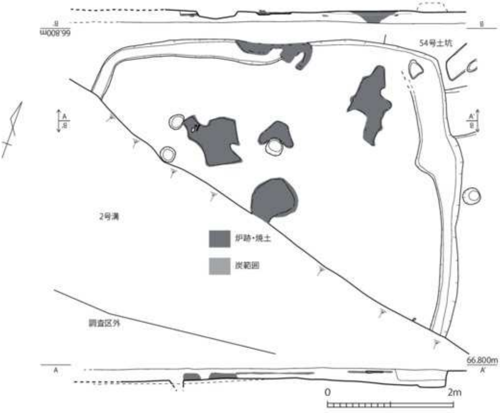
竪穴建物

1）1号竪穴建物（第199図）

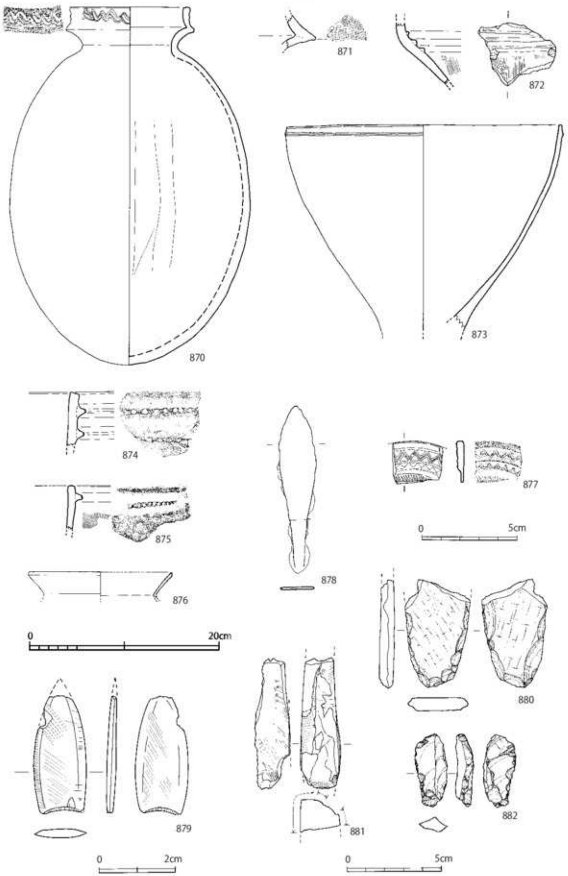
調査区の南西端で確認された竪穴建物で、溝によって南側半分が切られており、北東角部は54号土坑に切られている。東西方向は5.70mで、南北方向は4.6＋αmである。深さは0.20mである。北側壁の西側半分と東壁際には幅約0.3m、深さ数cmの壁溝がある。床面には四カ所で焼土が確認されているが、中央が地床炉である。

図示できる出土遺物は16点である。第200図870から872は安国寺式土器壺で、870は口縁部上半があまり伸びないタイプで、櫛描波状文も一条しか施文されないが、体部は長胴の丸底である。872は三条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す。873から876は刻目突帯文を巡らす下城式土器、876は器壁の薄い甕で、内面ヘラケズリである。877は後漢鏡片。方格規矩鏡で、外区に複波文帯一鋸歯文帯を廻らせ、内区の斜行櫛歯文帯まで確認できる。878は鉄鏃、879は緑泥片岩製の磨製石鏃、880は同じく磨製石鏃の未成品、881は砂岩製の砥石、882は姫島産黒曜石製の二次加工剥片、883から885はいずれも安山岩製で、石皿（883）、凹石（884）、敲石（885）である。

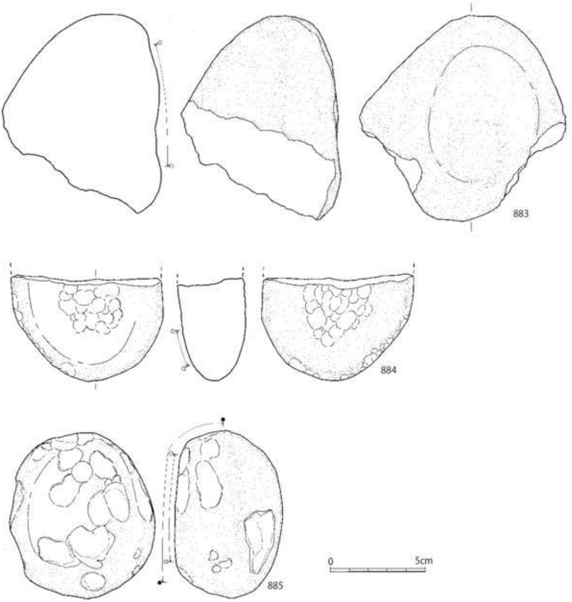
この竪穴建物の時期は、870の存在と、876の口縁部を小さくつまみ上げる薄手の甕の存在からⅩ期（古墳前期）と考えられる。



第199図　7次1号竪穴建物



第 200 図　7 次 1 号竪穴建物出土遺物①



第201図　7次1号竪穴建物出土遺物②

3）3号竪穴建物（第202図）

調査区の南西部で確認された竪穴建物で、4号竪穴建物と切り合い関係を持つが、上部の削平により先後関係は確認できなかった。また、26号、27号、28号、31号土坑を切っている。床面からは数カ所でピットが確認されているが、主柱穴は確認できなかった。炉跡や土坑も確認できなかった。

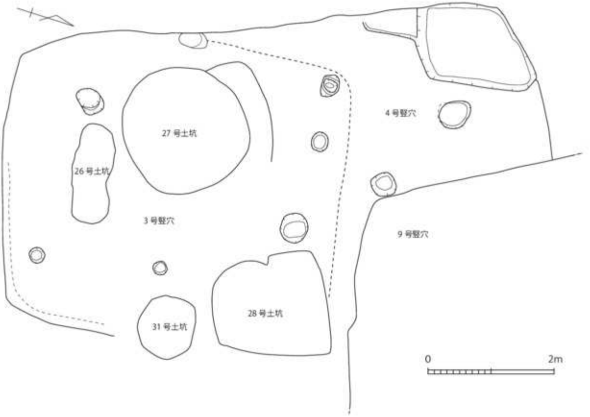
図示できる出土遺物は8点である。第203図886は鋤先状の口縁部を持つ壺で、上面に円形浮文を付す。887は平行沈線の間を刺突文で埋める壺の肩部、888は一条の突帯の下位に勾玉状の浮文を付す。889と890は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、891と892は平底の甕底部である。893は緑泥片岩製の磨製石鏃である。

出土遺物は中期のものが多いが、888の存在などから後期に下る。詳細な時期は決められないが、前半の可能性が高い。

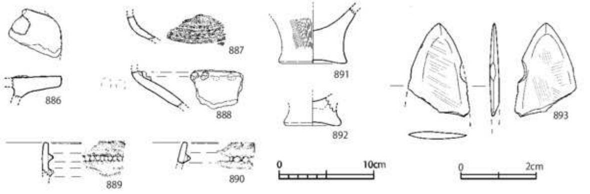
4）4号竪穴建物（第202図）

調査区の南西部で確認された竪穴建物で、9号竪穴建物に切られ、3号竪穴建物と切り合い関係を持つが、上部

の削平により先後関係は確認できなかった。床面からはピットが複数検出されているが、主柱穴は確認できなかった。炉跡も確認できなかったが、北西角部では 1.6m × 1.2m で深さ 0.2m の土坑が確認されている。
出土遺物はなかったので、時期は不明である。

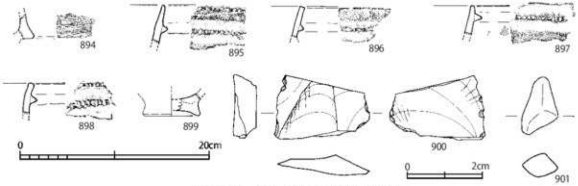


第202図　7次3、4号竪穴建物



第203図　7次3号竪穴建物出土遺物

4）6号竪穴建物
「6号住居」出土遺物として一括されたものであるが、図面上では場所が特定できない。調査の途次に遺構でないことが判明したものと考えられるが、ここでは出土時の一括性を尊重し、「6号竪穴建物」出土資料として説明する。
図示できる出土遺物は8点である。第204図894は櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、895から898は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、899はやや上げ底の甕底部である。900は姫島産黒曜石製の剥片、901は研磨された蛇紋岩の小礫である。



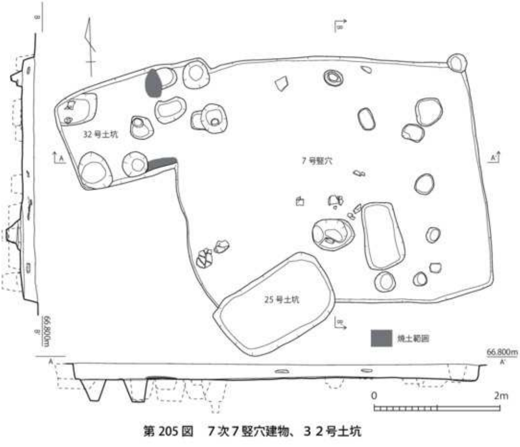
第 204 図　７次６号竪穴建物出土遺物

5）７号竪穴建物（第 205 図）

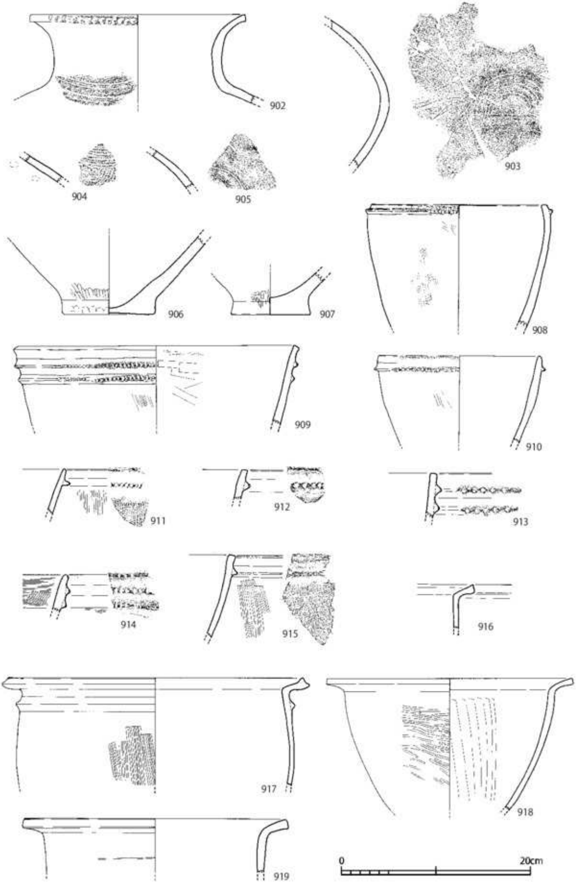
調査区中央やや南寄りで確認された竪穴建物である。25 号土坑に切られており、32 号土坑と切り合い関係を持つが、先後関係は不明である。南北 3.90m、東西 4.83m の長方形を呈し、残存する深さは 0.25m である。床面からは複数のピットが検出されているが、主柱穴は不明である。炉跡は確認できなかったが、中央やや南寄りで 0.63m × 0.50m、深さ 0.23m の楕円形の土坑が確認されている。

図示できる出土遺物は 28 点である。第 206 図 902 から 905 は半裁竹管を使用して直線文、重弧文を描く下城式土器壺である。902 は頸部を直立させ、口縁部を外反させながら開く。906 と 907 は平底の壺底部で、下城式土器壺のものか。908 から 915 は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕である。908 や 910 は突帯の位置が口縁直下で、908 はさらに口縁部が内湾するなど古式の要素を持つ。917 は口縁端部を摘み上げ、頸部下に突帯を一条巡らす東北部九州系の甕、918 と 919 は緩やかに外反して開く口縁部の甕。第 207 図 920 から 923 は甕の底部で、923 はやや突出気味の他は平底である。924 は平底の鉢。口縁部は緩やかに外反する。925 は姫島産黒曜石製の打製石鏃、926 から 929 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品である。

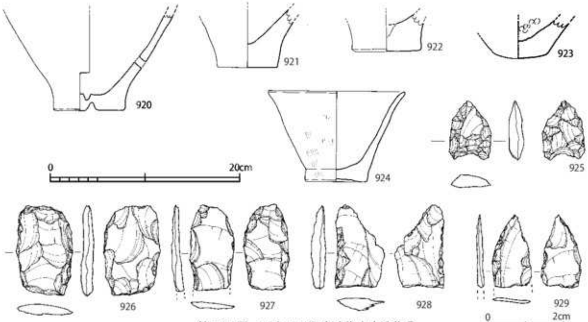
この竪穴建物の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）と考えられるが、中期には少ない方形基調の竪穴プランであることと、923 の甕底部は後期の可能性があり、後期まで下る可能性は排除できない。しかしながら、この竪穴建物を切っている 25 号土坑からも中期の遺物しか出土しておらず、7 号竪穴建物も中期のものと想定しておく。



第 205 図　７次７竪穴建物、３２号土坑



第 206 図　7 次 7 号竪穴建物出土遺物①

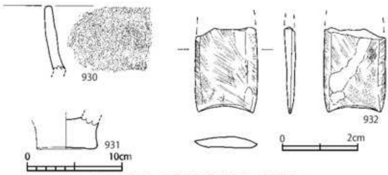


第 207 図　７次７号竪穴建物出土遺物②

６）８号竪穴建物

「8 号住居」出土遺物として一括されたものであるが、図面上では場所が特定できない。調査の途次に遺構でないことが判明したものと考えられるが、ここでは出土時の一括性を尊重し、「8 号竪穴建物」出土資料として説明する。

図示できる出土遺物は３点である。第 208 図 930 は口縁部上半が大きく伸びた安国寺式土器壺である。931 は平底の甕底部である。932 は結晶片岩製の磨製石鏃である。

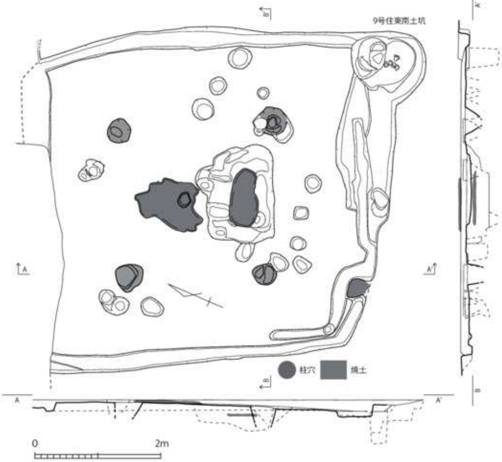


第 208 図　７次８号竪穴建物出土遺物

８）９号竪穴建物（第 209 図）

調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物で、10 号竪穴建物に切られ、29 号竪穴建物を切っている。一部を除き、四周には壁溝が廻る。主柱穴は四カ所で、床面中央やや北寄りには地床炉があり、その南側には炭化物が堆積した土坑（1.56m × 1.05m）がある。

図示できる出土遺物はなかったため、この竪穴建物の時期は不明である。

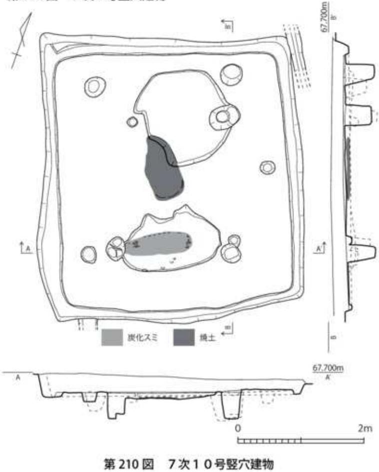


第 209 図　７次９号竪穴建物

9）10 号竪穴建物（第 210 図）

調査区中央やや西寄りで確認された竪穴建物で、9 号、29 号、30 号竪穴建物を切っている。四周には幅 0.1m ～ 0.25m、深さ 0.05m 前後の壁溝が廻る。主柱穴は四カ所で、床面ほぼ中央には焼土の堆積した炉跡が、その南側には 1.6m × 0.8m の楕円形で、深さ約 0.08m の土坑があり、内部には炭化物が堆積していた。

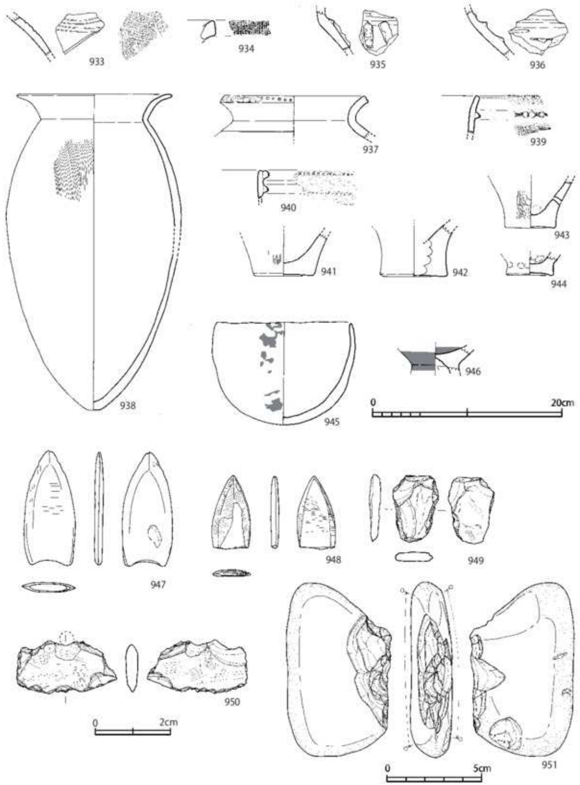
図示できる出土遺物は 19 点である。第 211 図 933 は半裁竹管による平行沈線を描く下城式土器壺、934 は断面三角形になり、外面にハケ様のもので縦方向に沈線を入れる複合口縁の壺、935 は突帯の下に勾玉状浮文を付す安国寺式土器壺、936 も三条の突帯を巡らす安国寺式土器壺である。937 は口縁端部外面に円形の刺突文を押す壺。938 から 944 は甕で、938 は小さな平底で長胴、口縁部は「く」字形に折れ開く甕、939 と 940 は刻目突帯文を巡らす下



第 210 図　７次１０号竪穴建物

城式土器甕、941 から 944 は平底の甕底部である。945 は丸底で深い鉢、946 は高坏の底部か。947 は結晶片岩製の、948 は立石産輝緑凝灰岩製の磨製石鏃である。949 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、950 は立石産輝緑凝灰岩の石包丁、951 は安山岩製の加工痕のある礫である。

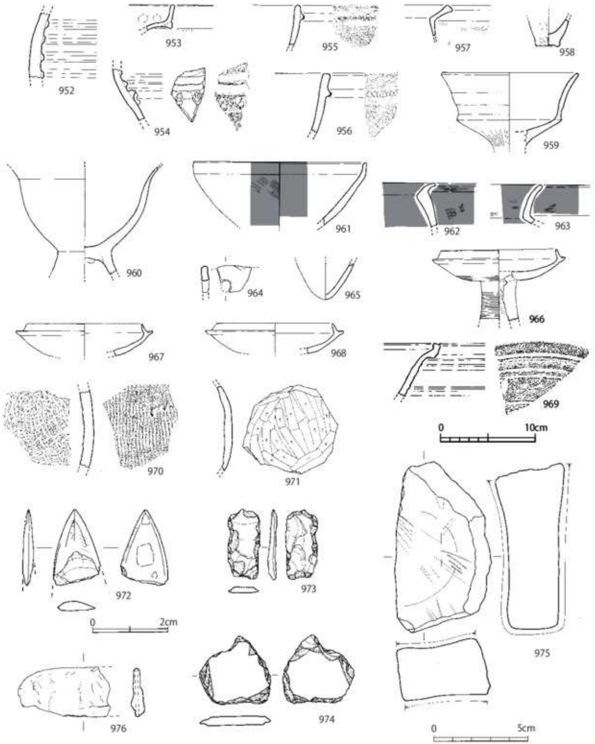
この竪穴建物の時期は、Ⅷ期（後期後葉）と考えられる。



第 211 図　７次１０号竪穴建物出土遺物

８）11号竪穴建物（第225図）

調査区の中央やや北西寄りで検出された竪穴建物で、大部分を19号竪穴建物に切られているとされる。東西は4.4m程で、隅丸方形を呈すると考えられる。深さは数cmである。19号竪穴建物の外側ではこの建物に伴う炉跡や土坑は確認できないが、後述のように19号竪穴建物内で検出された焼土塊が、11号竪穴建物に伴うものである可能性が高い。



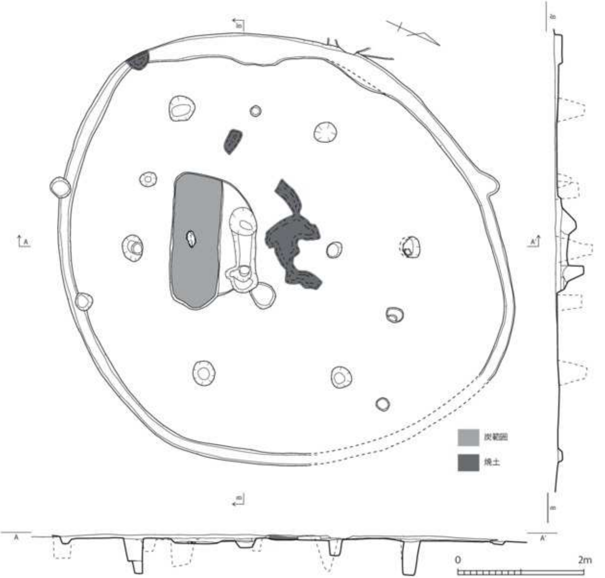
第212図　7次11号竪穴建物出土遺物

図示できる出土遺物は 24 点である。第 212 図 952 は長い頸部に 4 条の扁平な突帯を廻らせる壺、953 と 954 は安国寺式土器壺で、953 は口縁部上半が直立し、外面は無文、954 は肩部に三条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す。955 と 956 は刻目突帯文を一条巡らす下城式土器甕、957 は口唇部を肥厚させる東北部九州系の甕、958 は平底の鉢か。959 は坏部上半が外反しながら開く坏部の深い高坏、960 は脚付きの鉢、961 は口縁部上半が短く立ち上がる高坏である。962 は小さく折れ曲がる口縁部の壺、963 も外反しながら開く口縁部の壺で、ともに内外面にベンガラが塗布される。964 は円孔があいた板状のもので、全形は不明であるが、高坏の脚の可能性が高い。965 は尖底状の底部を持つミニチュア土器か。966 から 971 は須恵器である。966 は有蓋高坏､967 と 968 は坏身で、直径は 11.8cmと 12.0cmである。969 は甕の口縁部で、2 段に折れ立ち上がる。970 は外面平行叩き、内面青海波文の叩きの甕、971 は外面にヘラ削り痕がある提瓶である。972 から 974 は結晶片岩製の磨製石鏃で、973 と 974 は未成品である。975 は砂岩製の砥石、976 は鉄製刀子と考えられる。

この 11 号竪穴建物は、調査時の所見では後期前半の 19 号竪穴建物に切られていると判断されたが、19 号竪穴建物を掘り下げる途中で南東部から大量の焼土塊が集中的に出土しており、その焼土塊が竈を破壊した痕跡だとしたら、11 号竪穴建物が 19 号竪穴建物を切っていたことになる。今となっては確認できないが、11 号竪穴から大量の須恵器が出土していることは、その考えを支持するものであろう。そうすれば、この 11 号竪穴建物の時期は 6 世紀後半となる。

9）12 号竪穴建物（第 213 図）

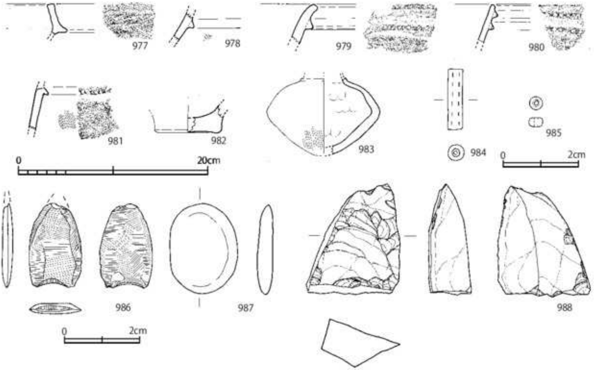
調査区中央北側で確認された竪穴建物で、南北 7.62m、東西 6.85m のやや楕円形を呈する円形建物である。幅 0.02m



第 213 図　7 次 1 2 号竪穴建物

前後で、深さ0.05m～0.10mの壁溝がほぼ全周している。主柱穴は円形に廻る八カ所である。中央には焼土が堆積する炉があり、その南側に間隔を0.75mあけて２本の柱穴があり、さらにその南側には2.10m×0.80mで深さ0.06mの長方形を呈する土坑がある。土坑内部には炭化物が堆積していた。

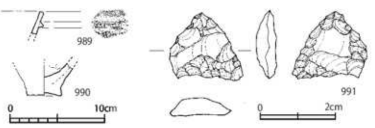
図示できる出土遺物は12点である。第214図977は二条の櫛描波状文を口縁部上半部に描く安国寺式土器壺、978は一条の断面三角形の突帯を廻らせる壺、979から981は刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、982は平底の甕底部である。983は小さな平底をなすと思われる壺で、長頸壺となるか。984は碧玉製の管玉、985は青色をしたガラス製小玉、986は立石産輝緑凝灰岩製の磨製石鏃である。他の遺構から出土している結晶片岩や緑泥片岩製の



第214図　7次１２号竪穴建物出土遺物

磨製石鏃と形態が異なり、搬入品であろう。987は研磨された蛇紋岩の小礫、988は姫島産黒曜石の二次加工品である。

この竪穴建物の時期は、977の存在から後期に下る可能性があるが、竪穴プランが円形であり、中期の可能性もある。ただし、大分平野では後期まで円形プランのものがあるので確実ではない。



第215図　7次１３号竪穴建物出土遺物

10）13号竪穴建物

「13号住居」出土遺物として一括されたものであるが、図面上では場所が特定できない。調査の途次に遺構でないことが判明したものと考えられるが、ここでは出土時の一括性を尊重し、「13号竪穴建物」出土資料として説明する。

図示できる出土遺物は３点である。第215図989は一条の刻目突帯文を巡らす下城式土器甕、990は平底の甕底部、991は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

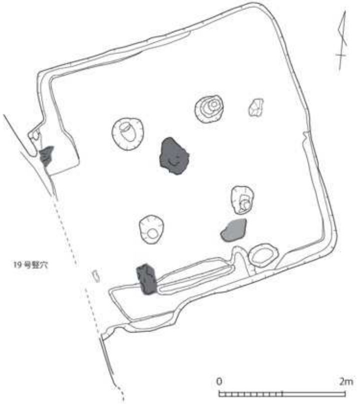
11）14号竪穴建物（第216図）

調査区北側で確認された竪穴建物で南西側が一部19号竪穴建物に切られている。南北4.18m、東西3.98mの方形で、残存する深さは0.25mである。南東角部と北西角部には幅0.01m前後で深さ数cmの壁溝がある。主柱穴は四カ所で、中央には炉跡と考えられる焼土が堆積する。南側の壁に接して、長さ2.28m、幅0.55mのごく浅い土

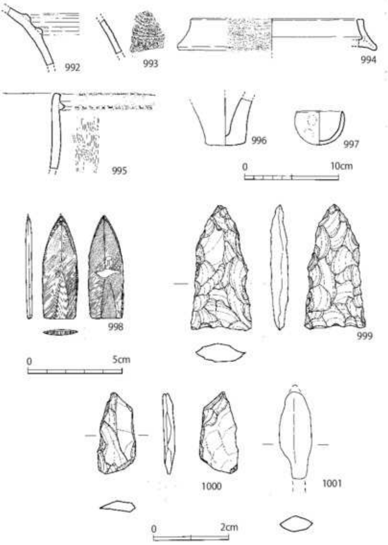
坑があり、その土坑の北東側に炭化物が堆積していた。

図示できる出土遺物は９点である。第 217 図 992 は肩部に断面台形の突帯を二条廻らせる壺、993 は半裁竹管による沈線文を描く下城式土器壺、994 は口縁部上半に櫛描波状文を施す安国寺式土器壺である。995 は口縁直下に刻目突帯文を一条巡らす下城式土器甕、996 は甕で、僅かに突出気味の平底底部、997 は小型の鉢で丸底である。998 は立石産輝緑凝灰岩製の磨製石鏃、999 はサヌカイト製の打製石鏃、1000 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1001 は残存長 2.3cmの銅鏃である。先端部を欠き、茎は途中で折れている。

この建物の時期は、Ⅵ期（後期前葉）からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



第 216 図　７次１４号竪穴建物



第 217 図　7 次１４号竪穴建物出土遺物

12）15 号竪穴建物（第 218 図）

調査区北端で確認された竪穴建物で、16 号、25 号竪穴建物に切られており、また調査区外に延びるため規模、形状は不明である。辛うじて南壁の一部が残っているが、残存する深さは僅か 2cmほどである。主柱穴は確認できないが、1.50m × 0.75m の楕円形を呈する土坑があるが、内部に炭化物が堆積しており、位置から考えて（通常中央にある炉の南側）この建物に伴う土坑であろう。

図示できる出土遺物は 7 点である。第 219 図 1002 は口縁部上半に櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1003 は口縁端部とその下に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1004 やや上げ底状を呈す甕底部、1005 は屈曲部に一条の突帯を廻らせる高坏で、底部を充填していた円盤が抜けたものもある。1006 は緑泥片岩製の磨製石鏃未成品、1007 は姫島産の黒曜石製の尖頭状石器、1008 はチャート製の石鏃である。

この竪穴建物の時期は、1004 の底部形状からⅦ期（後期中葉）前後と考えられる。

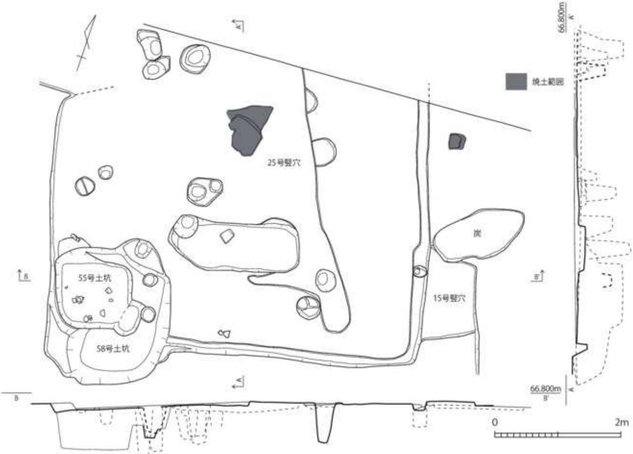
13）16 号竪穴建物（第 220 図）

調査区の北東部で検出された竪穴建物である。15 号竪穴建物を切り、24 号竪穴建物によって大きく切られている。そのため、全形は不明であるが、南北は 4.82m 程と考えられる。24 号竪穴建物のエリアも含めて多くの柱穴があるが、主柱穴は指摘できない。また、24 号竪穴建物の南壁に重なる形で検出された 1.3m × 0.75m で深さ 0.05m ほどの不定形の土坑は、炭化物が堆積しており、位置からもこの 16 号竪穴建物に伴う土坑と考えられる。

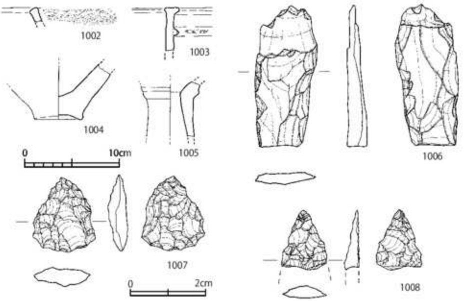
図示できる出土遺物は 6 点である。第 221 図 1009 は肩部に半裁竹管による平行線を描く下城式土器壺である。

1010は頸部に断面三角形の突帯を一条廻らせ、突帯の下に勾玉状浮文を付す壺で、内外面ともベンガラが塗布されている。1011と1012は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1013は平底の甕底部である。1014は鉄製の鉇で、残存長は13.1㎝である。

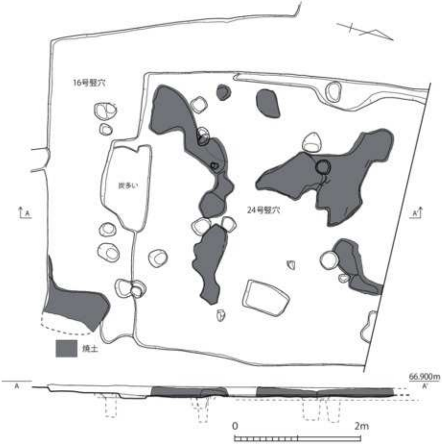
この竪穴建物の時期は、1010の壺から後期に下ると考えられるが、詳細な時期は不明である。



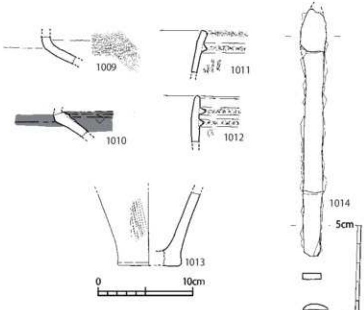
第218図　7次１５、２５竪穴建物



第219図　7次１５号竪穴建物出土遺物



第 220 図　７次１６、２４号竪穴建物



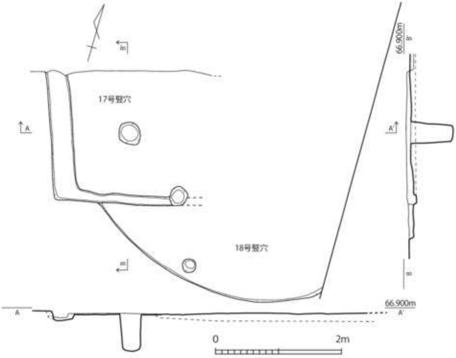
第 221 図　７次１６号竪穴建物出土遺物

14）17 号竪穴建物（第 222 図）

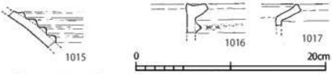
調査区北東角部付近で確認された竪穴建物で、16 号竪穴建物に切られ、18 号竪穴建物を切っている。

図示できる出土遺物は 3 点である。第 223 図 1015 は肩部に四条の突帯を廻らせる壺、1016 は口縁端部を大きく外側に肥厚させ、その下位に刻目突帯文を一条廻らせる甕、1017 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕である。

この竪穴建物の時期は、図示した遺物は中期のものであるが（1015 は後期に下る可能性あり）、竪穴プランが方形であることから後期に下ると考えられる。



第 222 図　7 次１７号、１８号竪穴建物



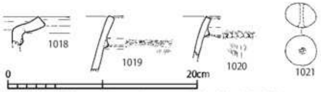
第 223 図　7 次１７号竪穴建物出土遺物

15）18 号竪穴建物（第 222 図）

調査区北東角部付近で確認された竪穴建物で、17 号竪穴建物に切られている。東側は調査区外に延び、北側は削平を受けて確認できなかった。竪穴プランは円形であるが、規模は不明で、主柱穴や炉も確認できなかった。

図示できる出土遺物は 4 点である。第 224 図 1018 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、1019 と 1020 は一条の突帯を廻らせる下城式土器甕である。1021 は直径 3.2cmの土錘である。

この竪穴建物の時期は、竪穴プランが円形であることから中期に遡る可能性がある。図示した遺物が時期を示すとすれば、Ⅱ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）である。



第 224 図　7 次１８号竪穴建物出土遺物

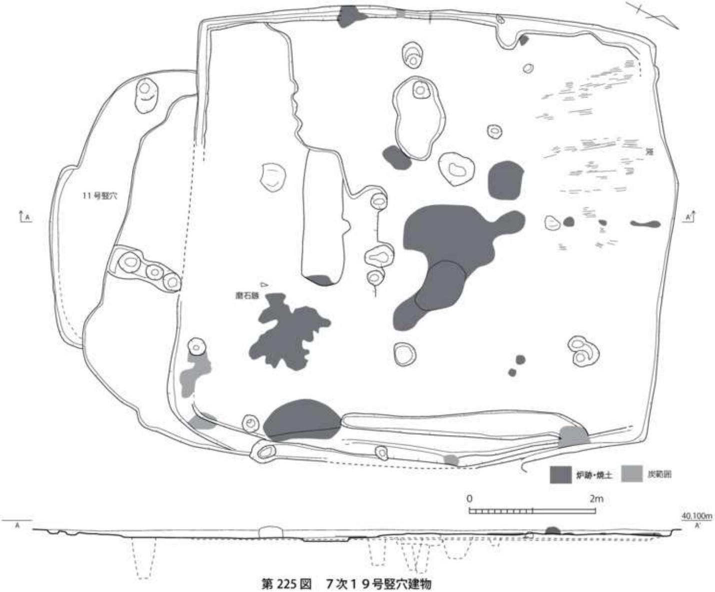
16）19 号竪穴建物（第 225 図）

調査区の北西部で検出された竪穴建物で、今回報告する竪穴建物では最大規模である。規模は南北 7.65m、東西 7.27m で、残存する深さは 0.12m ほどのやや長方形を呈する竪穴建物である。東西の壁際には、幅 0.10m ～ 0.20m の壁溝が廻る。これほど大型の建物にもかかわらず、主柱穴は確認できていない。炉はほぼ中央にある、長軸 1.4m ほどの焼土部分で、そのすぐ南側には 0.9m の間隔をあけた２本の柱穴があり、さらにその南には 2.17m × 0.62m、深さ 0.05m の長方形を呈する土坑がある。中央の炉、その南の２本の柱穴、その南の土坑というパターンを踏襲している。

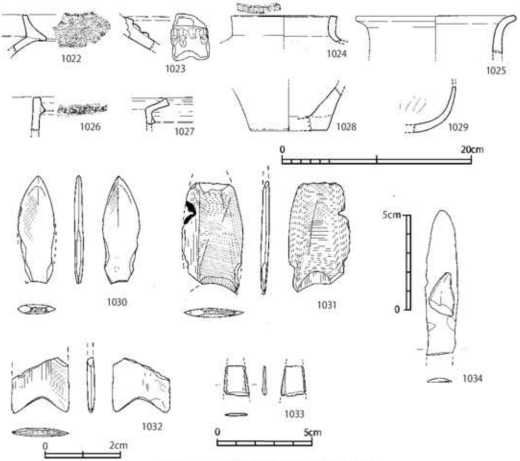
今回、残された図面を検討したところ、この 19 号竪穴建物の南東部において、「高い炉」との記述があり、写真でも焼土のブロックが浮いた状態で出土しているのが確認された。これは、11 号竪穴建物から須恵器が出土していることから、本来は 11 号竪穴建物が 19 号竪穴建物を切って作られ、「高い炉」の焼土ブロックは 11 号竪穴建物に伴う竈が破壊された痕跡ではないかと考えておきたいと思う。しかし、その場合でも 11 号竪穴建物のプランがうまく納まらないが、あるいは図面で 11 号竪穴建物を切っているように描かれる遺構（遺構番号なし）が、本来須恵器を伴う竪穴建物であった可能性もある。これ以上の資料は残されておらず、遺憾ながら確定はできない。

図示できる出土遺物は 13 点である。第 226 図 1022 と 1023 は安国寺式土器壺で、1022 は口縁部外面に二条の櫛描波状文を描く。1023 は頸部突帯の下に勾玉状浮文を連続的に付す。1024 は口縁部が短く直立する壺、1025 は頸部が直立し、口縁部が小さく屈曲する壺、1026 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1027 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、1028 は平底の甕底部、1029 は丸底になる鉢である。1030 から 1033 は磨製石鏃で、いずれも結晶片岩製である。1034 は鉄製の鉇で、残存長は 7.6cmである。

この竪穴建物の時期は、1022 や 1023 からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



第 225 図　7次１９号竪穴建物



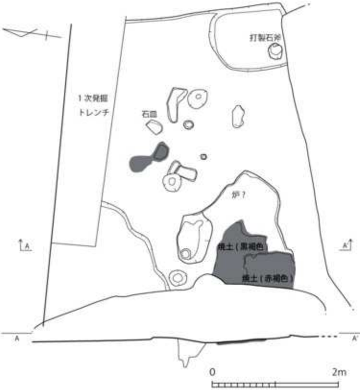
第 226 図　７次１９号竪穴建物出土遺物

17）20 号竪穴建物（第 227 図）

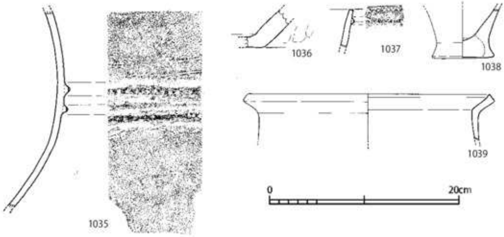
調査区北西端で確認された竪穴建物で、19 号、26 号竪穴建物に切られ、北側は調査区外に延びる。かろうじて南東角部が残るが、規模は不明である。床面には焼土やピットがあるが、26 号竪穴建物に切られた焼土や炭化物は炉に関わるものかもしれない。主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は５点である。第 228 図 1035 は体部に二条の刻目突帯が廻り、その下位に二条の沈線を廻らせる前期の壺である。器壁が荒れていてミガキは確認できない。1036 は平底の壺底部、1037 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1038 はやや厚手の平底の甕底部、1039 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕である。

この竪穴建物の時期は、プランが方形であれば後期に下る可能性が高いが、1035 などから考えて、Ⅳ期（中期後葉～末）と考えておきたい。

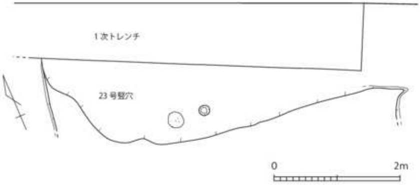


第 227 図　７次２０号竪穴建物



第 228 図　7次２０号竪穴建物出土遺物

20）23 号竪穴建物（第 229 図）

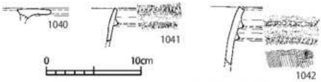


第 229 図　7次２３号竪穴建物

調査区北端で確認された竪穴建物で、大部分は調査区外に延びる。円形プランの建物と考えられるが、規模などは不明である。

図示できる出土遺物は３点である。第 230 図 1040 は逆「L」字状口縁の甕、1041 と 1042 は刻目突帯が廻る下城式土器甕である。

この竪穴建物の時期は、図示した土器からはⅢ期（中期中頃）からⅣ期（中期後葉～末）と考えられる。



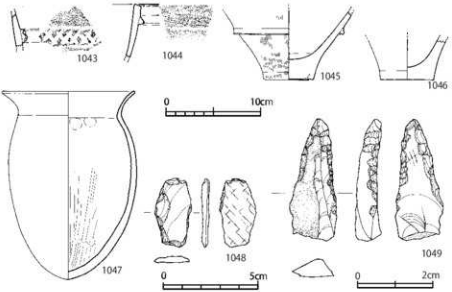
第 230 図　7次２３号竪穴建物出土遺物

21）24 号竪穴建物（第 220 図）

調査区北東角部で検出された竪穴建物で、16 号竪穴建物を切っている。北側は調査区外に延びるため、南北の規模は不明であるが、東西は 4.50m で、残存する深さは 0.15m である。西壁際には幅 0.12m ～ 0.16m の壁溝が延びる。床面には焼土のブロックが複数個所あり、焼失家屋の可能性がある。柱穴は複数検出しているが、主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は７点である。第 231 図 1043 は「×」を刻むベルト状突帯を巡らす安国寺式土器壺、1044 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1045 は底部に近い部分に断面三角形の突帯を廻らせる平底の壺、1046 は平底の甕底部、1047 は「く」字形に折れて外反しながら開く長胴、丸底の甕である。1048 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1049 は姫島産黒曜石製の石錐である。

この竪穴建物の時期は、Ⅸ期（弥生時代終末）と考えられる。



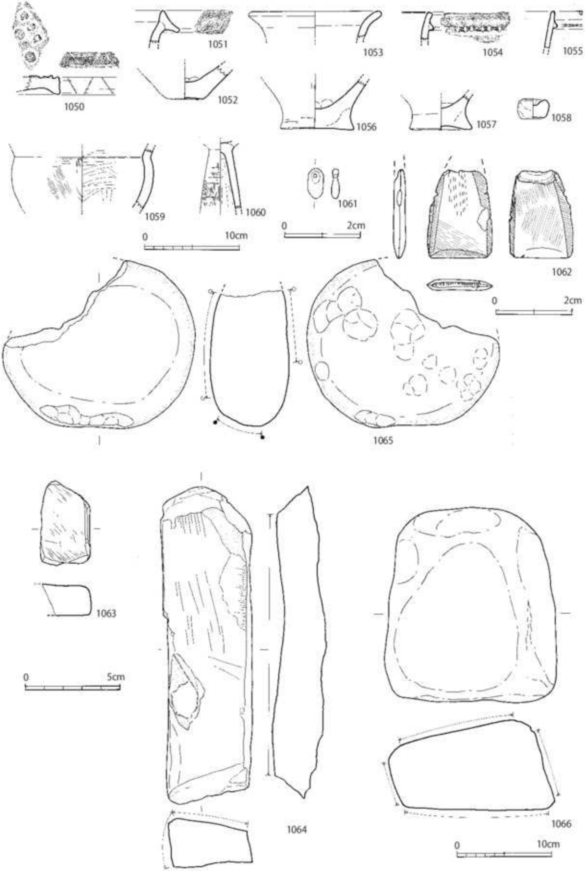
第 231 図　７次２４号竪穴建物出土遺物

22）25 号竪穴建物（第 218 図）

調査区の北端で確認された竪穴建物で、15 号竪穴建物を切っており、北側三分の一ほどは調査区外となる。そのため、南北の規模は分からないが、東西は 6.02m で、残存する深さは 0.07m ほどである。東側と南側の壁際には幅 0.12m ～ 0.20m、深さ 0.07m ほどの壁溝が廻る。主柱穴は四カ所と考えられるが、北東の一カ所は調査区外である。ほぼ中央と考えられる位置に焼土があり、炉と思われる。その炉と南壁との間には 2.05m × 0.75m で深さ約 0.10m の、炭化物が堆積した土坑がある。また、床面の南西角部付近には 55 号、58 号土坑があり、25 号竪穴建物が切っている。

図示できる出土遺物は 17 点である。第 232 図 1050 は鋤先状の口縁部で、上面に勾玉状と円形の浮文が列をなして付され、外面には連続「ハ」字状の押圧文を廻らせる小川原式土器壺である。1051 は口縁部外面に一条の櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1052 は平底をなす壺の底部、1053 は外反しながら開く壺の口縁部、1054 と 1055 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1056 と 1057 は平底の甕底部、1058 は小さな円形の粘土塊の上面を窪ませただけのミニチュア土器、1059 は内外面にベンガラを塗布した鉢、1060 は裾広がりの円柱状をした高坏の脚部で、内面にはしぼり痕、外面にはミガキが施されている。1061 は長楕円形をしたクロム白雲母製の垂飾品、1062 は粘板岩製の磨製石鏃、1063 と 1064 は砥石で、1063 は砂岩、1064 は粘板岩である。1065 は安山岩製の敲石（磨石）、1066 は角閃石安山岩製の台石である。

出土土器は中期後葉から末のものが多いが、この竪穴建物の時期は、1051 や 1060 から後期中葉以降と考えられる。

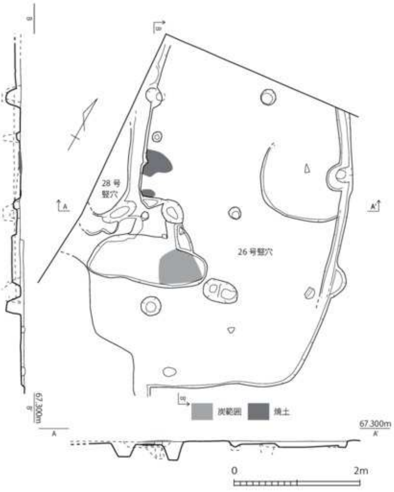


第232図　7次25号竪穴建物出土遺物

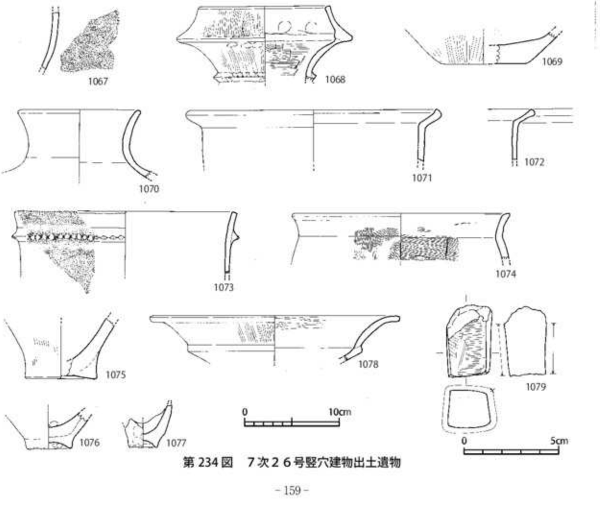
23）26 号竪穴建物（第 233 図）

調査区北西角部で確認された竪穴建物で、28 号竪穴建物に切られている。また、北側は調査区外に延びる。残存する深さは 0.05m である。東側壁際には幅 0.15m、深さ 0.03m ほどの壁溝が延びる。床面には、ほぼ中央と考えられる位置に焼土を伴う炉があり、その南側には炭化物が堆積する 1.85m × 0.70m、深さ 0.07m の土坑がある。さらに、東側壁際には直径 1.30m、深さ 0.05m の円形の土坑がある。主柱穴は四カ所と思われるが、西側が不明である。

図示できる出土遺物は 13 点である。第 234 図 1067 は半裁竹管による平行線を描く下城式土器壺である。1068 は頸部に一条の突帯を廻らせる安国寺式土器壺、1069 は平底の壺底部、1070 は外反しながら開く口縁部の壺、1071 と 1072 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州甕、1073 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1074 は



第 233 図　７次２６、２８号竪穴建物



第 234 図　７次２６号竪穴建物出土遺物

「く」字形に折れ開く甕、1075 から 1077 は甕の底部で、1076 と 1077 は上げ底状を呈す。1078 は坏部上半が大きく外反しながら開く高坏である。1079 は泥岩製の砥石である。

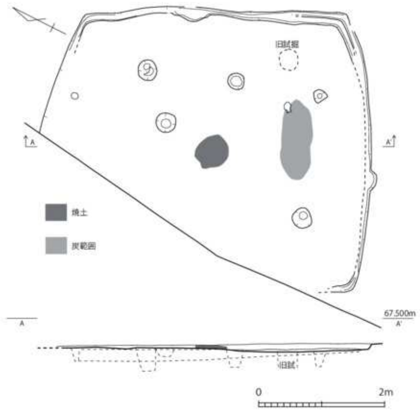
この竪穴建物の時期は、Ⅶ期（後期中葉）と考えられる。

24）27 号竪穴建物（第 235 図）

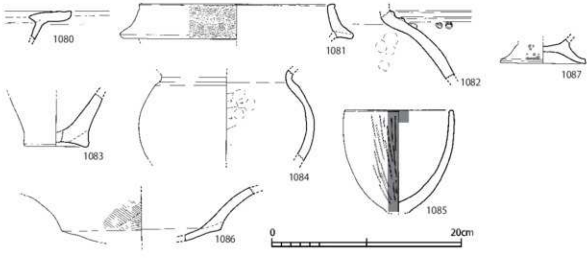
調査区北西部で検出された竪穴建物で、三分の一ほどは調査区外に延びる。南北は約 5.20m、東西は 4.43m のやや長方形を呈し、残存する深さは 0.10m ほどである。南側と東側の壁際には、幅 0.13m、深さ数㎝の壁溝が延びる。ほぼ中央に焼土を伴う炉があり、その南側には炭化物が堆積した 1.26m × 0.48m の浅い土坑がある。柱穴は五カ所で確認されているが、主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は 17 点である。第 236 図 1080 は鋤先状をなす口縁部の壺、1081 は口縁部上半に櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1082 は頸部に二条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す安国寺式土器壺、1083 は平底の甕底部、1084 は球形胴の壺、1085 は小さな平底をなすと思われる鉢、1086 は坏部上半が大きく外反しながら開く高坏、1087 は鉢の脚台である。1088 から 1093 は磨製石鏃で、1092 と 1093 は未成品である。1088 と 1090 が立石産輝緑凝灰岩、1089 と 1092 は結晶片岩、1091 は頁岩、1093 はサヌカイトである。1094 は姫島産黒曜石製の尖頭状石器、1095 は小国産黒曜石製の石匙、1096 は姫島産黒曜石製の剥片である。

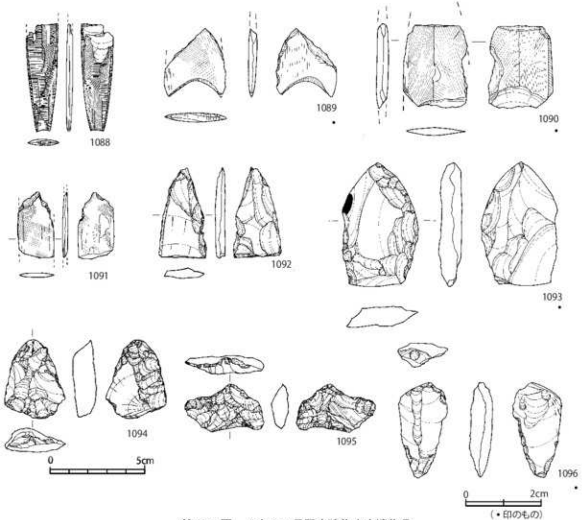
この竪穴建物の時期は、Ⅶ期（後期中葉）からⅧ期（後期後葉）と考えられる。



第 235 図　７次２７号竪穴建物



第 236 図　７次２７号竪穴建物出土遺物①



第 237 図　７次２７号竪穴建物出土遺物②

25）28 号竪穴建物（第 233 図）

調査区の北西角部で検出された竪穴建物である。26 号竪穴建物と切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。大部分が調査区外に延びるため、規模、形状とも不明であるが、直線的に伸びる壁溝が確認できるので、方形基調の建物と考えられる。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。

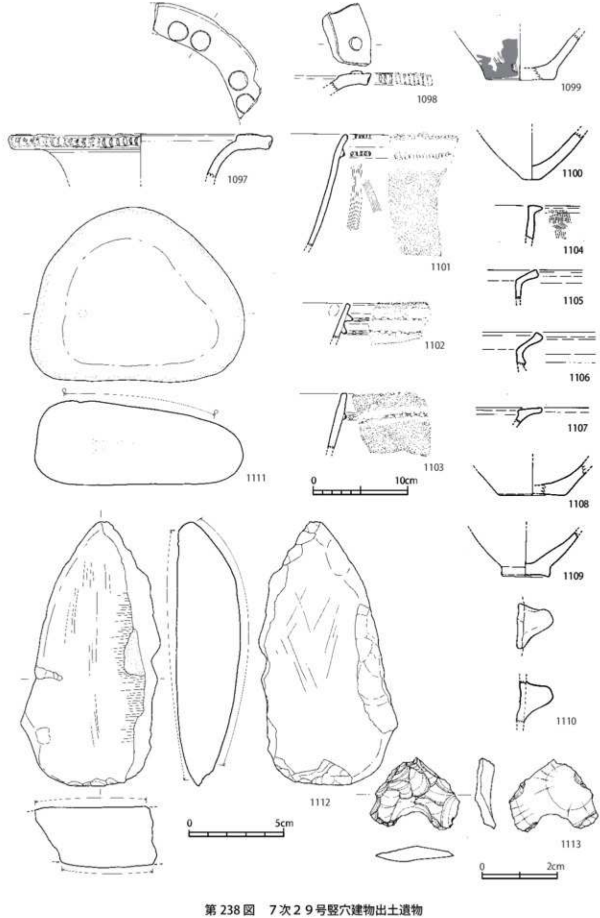
26）29 号竪穴建物（第 239 図）

調査区西端の中央で検出された竪穴建物で、9 号、10 号、30 号竪穴建物に切られ、60 号土坑を切っている。

西側は調査区外に延び、全形や規模は不明である。床面には二カ所焼土が堆積していた。ピットも複数あるが、主柱穴は不明である。

図示できる出土遺物は 15 点である。第 238 図 1097 と 1098 は鋤先状口縁の上面に円形浮文を貼り付け、外面に刺突文を持つ下城式土器壺と考えられる。1099 は平底の壺底部、1100 は小さな平底の甕底部、1101 から 1103 は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1105 と 1106 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1107 は鋤先状をなす壺の口縁部か、1108 は平底の壺底部、1109 は平底の甕底部、1110 は甑の取っ手である。1111 は安山岩製の石皿、1112 は安山岩製の磨石、1113 は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この竪穴建物の時期は、図示した資料の大半は中期のものであるが、1100 の甕底部からⅦ期（後期中葉）と考えられる。竪穴プランが方形であることもそれを支持する。



第 238 図　７次２９号竪穴建物出土遺物

27）30 号竪穴建物（第 239 図）

調査区西端の中央やや北寄りで検出された竪穴建物で、10 号、27 号竪穴建物に切られ、29 号竪穴建物を切っている。さらに西側は調査区外に延びる。そのため、全形や規模は不明である。

出土遺物はなく、時期は不明である。

第 239 図　7 次３０号竪穴建物

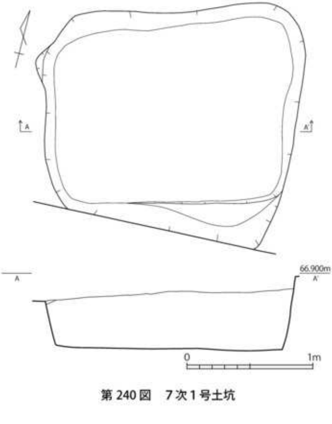
土坑

１）１号土坑（第 240 図）

調査区南東角部で検出された土坑で、南北 1.50m、東西 1.97m、深さ 0.35m の長方形を呈する土坑である。

図示できる出土遺物は５点である。第 241 図 1114 から 1116 は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1117 と 1118 は平底の甕底部である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第 240 図　7 次１号土坑

２）２号土坑（第 242 図）

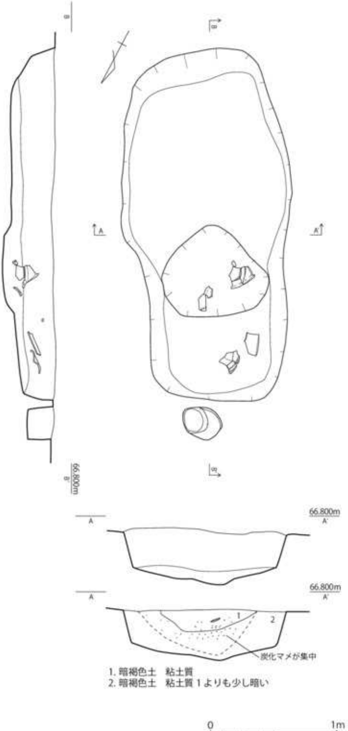
調査区南東角部で付近検出された土坑で、南北 2.78m、東西最大で 1.35m、深さ 0.33m の長方形を呈する土坑である。床面中央やや北寄りには直径 0.7m ほどの不整円形の窪みがある。堆積土の中位からは炭化した種子（豆類）が多量に出土している。

図示できる出土遺物は 21 点である。第 243 図 1119 は大きく開く広口壺で、外面はよく磨かれている。1120 は頸部に三条の断面が薄い台形の突帯を巡らす壺、1121 は内

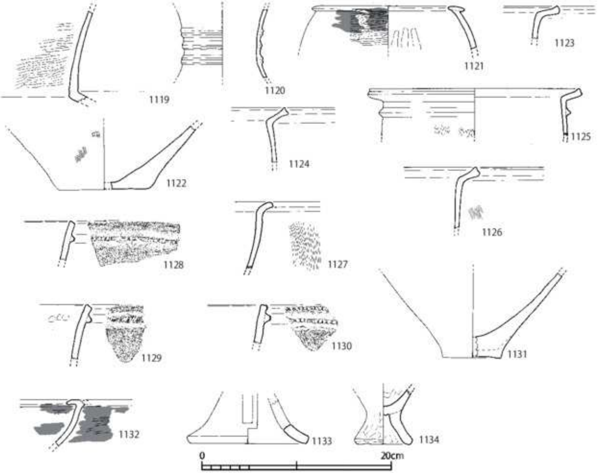
第 241 図　7 次１号土坑出土遺物

湾しながら立ち上がる体部に、小さく折れ曲がる口縁部がつく壺、1122は平底の壺底部、1123から1126は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系、1127は「く」字状に折れ開く甕、1128から1130は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1131は平底の甕底部、1132は内外面にベンガラを塗布する高坏で、口縁部は鋤先状をなし、坏部は半円形を呈する。1133も高坏で、縦長の長方形透かしを持つ。1134は指頭圧痕を残す脚台で、鉢のものであろう。

この土坑の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第242図　7次2号土坑



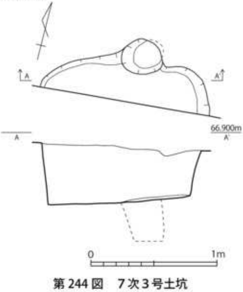
第 243 図　7 次 2 号土坑出土遺物

3）３号土坑（第 244 図）

調査区の南壁東寄りで検出された土坑である。大部分は調査区外に延びる。規模は東西が 1.30m で、深さは 0.48m である。

図示できる出土遺物は５点である。第 245 図 1135 は外面にベンガラを塗布する安国寺式土器壺で、二条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状の浮文（下側半分はすべて欠損）を付す。1136 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1137 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1138 は平底の甕底部である。1139 は安山岩製の扁平打製石斧である。

この土坑の時期は、1135 の存在から後期に下ると考えられる。



第 244 図　7 次 3 号土坑

第 245 図　7 次 3 号土坑出土遺物

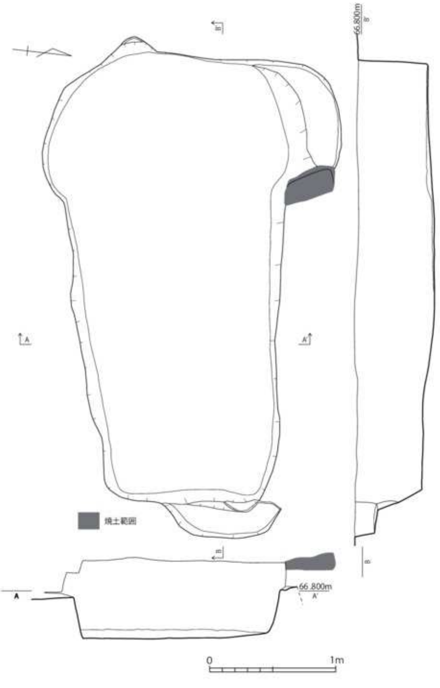
４）４号土坑（第 246 図）

調査区南東角部付近で検出された、南北 1.35m ～ 1.72m、東西 3.55m、深さ 0.60m の大型の長方形を呈する土坑である。西側はやや南北に拡大するように広がる。

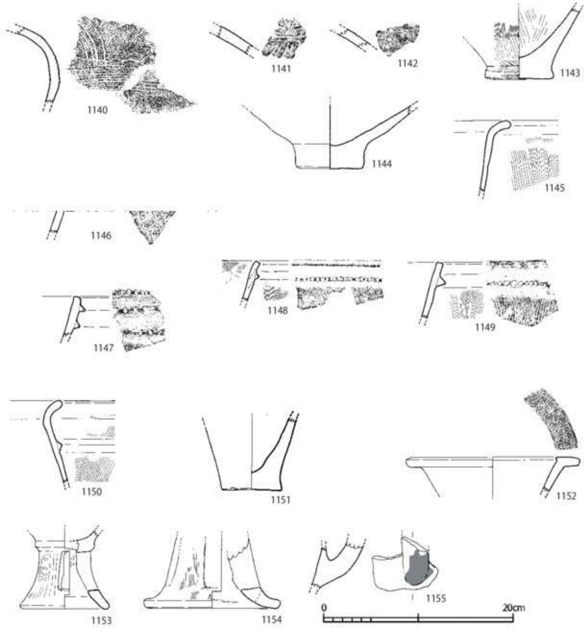
図示できる第 247 図出土遺物は 24 点である。1140 から 1142 は半裁竹管による直線文や重弧文を描く下城式土器壺、1143 と 1144 は平底の壺底部である。1145 は口縁端部をわずかに肥厚させる甕、1146 から 1149 は刻目突帯が廻る下城式土器甕である。1150 は頸部下に一条の断面三角形の突帯を廻らせる壺で、口縁部は短く外反して開く。1151 は平底の甕底部、1152 は口縁部が逆「L」字形に折れる高坏で、上面に 7 本単位のヘラ描き直線文を施す。1153 と 1154 は縦長の長方形透かしを持つ高坏の脚部、1155 はコップ形土器の把手であろう。

第 248 図 1156 は泥岩製の抉入柱状片刃石斧、1157 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1158 は砂岩製の磨石（敲石）、1159 は凝灰岩製の石皿である。

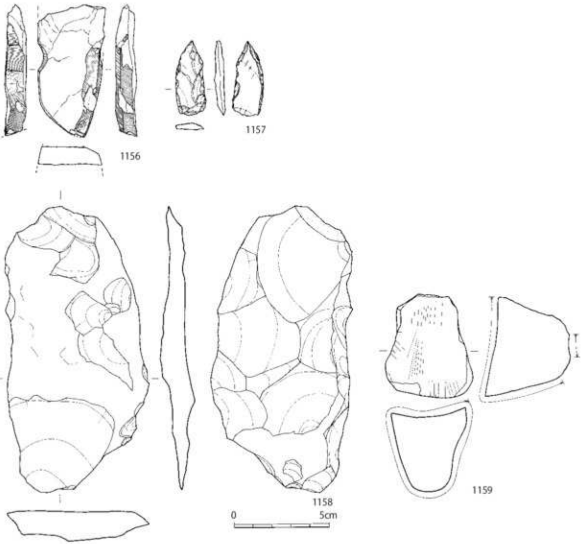
この土坑の時期は、下城式土器甕の口縁部形状などからⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。



第 246 図　７次４号土坑



第 247 図　7 次 4 号土坑出土遺物①



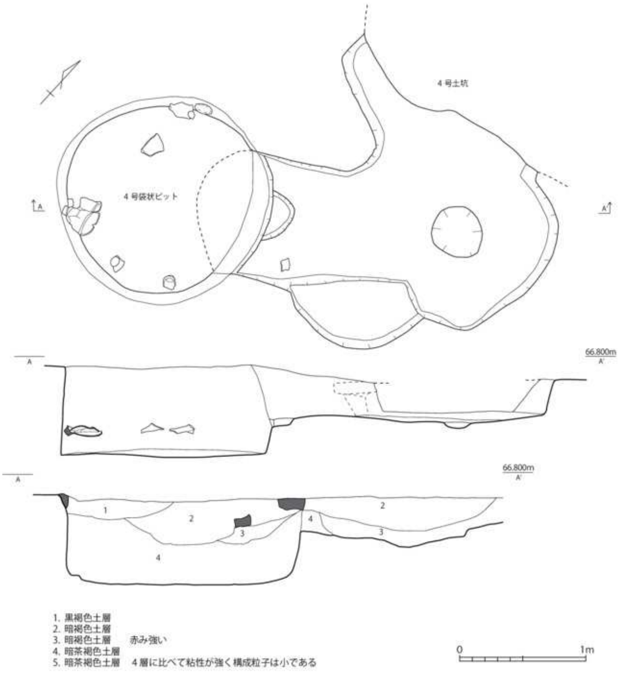
第 248 図　7 次 4 号土坑出土遺物②

63）4 号袋状ピット（第 249 図）

調査区南端中央付近で検出された土坑である。上端で 1.45m、下端で 1.63m の円形を呈する、断面袋状の土坑である。残存する深さは 0.65m である。

図示できる出土遺物は 4 点である。第 250 図 1160 は完形に復元できる下城式土器甕で、口縁部は内湾し、底部はあまり厚くない平底である。1161 は平底の甕底部である。1162 は砂岩製の敲石（磨石）、1163 は凝灰岩製の石皿である。

この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。

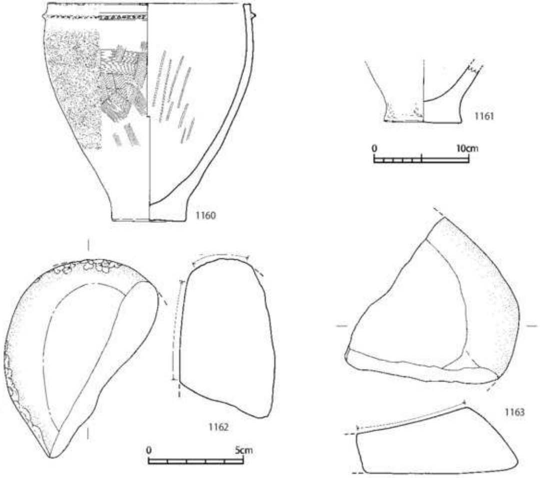


第 249 図　7 次４号袋状ピット

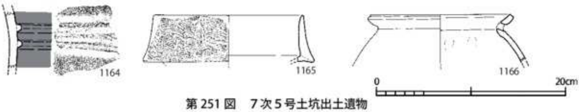
６）５号土坑

「5 号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「5 号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は 3 点である。第 251 図 1164 は外面にベンガラが塗布され、断面台形の突帯が二条廻る甕、1165 は口縁部上半が大きく伸び､三条の櫛描波状文が描かれる安国寺式土器壺､1166 は頸部に穿孔を持つ壺である。



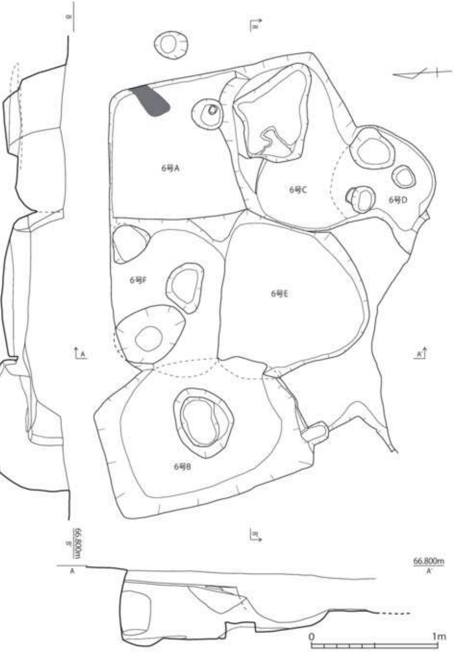
第 250 図　７次４号袋状ピット出土遺物



第 251 図　７次５号土坑出土遺物

7）６号土坑（第 252 図）

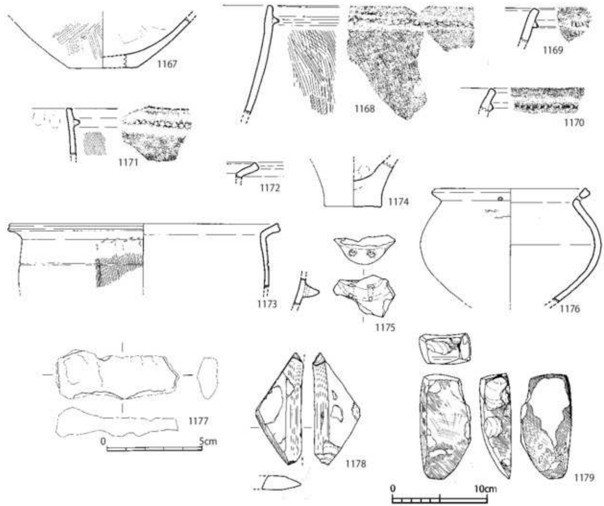
調査区南端近くで検出された土坑である。６基の土坑が切りあったものを、６号Ａから６号Ｆとして説明する。６号Ａは南北約 2.0m、東西約 2.4m、深さ約 0.1m の土坑と考えられる。６号Ｂは南北 1.59m、東西 1.15m の長方形を呈する土坑で、残存する深さは 0.55m である。６号Ｃは６号Ａを切り、６号Ｄに切られている。正確な大きさは分からないが、概ね南北 0.85m、東西 1.20m、深さ 0.53m ほどの長方形を呈する土坑と思われる。６号Ｅは６号Ａを切っており、６号Ｄや６号Ｆに接するが先後関係は不明である。大きさは想定で、南北 1.0m、東西 1.35m、深さ 0.4m で、長方形を呈する。６号Ｆは、想定で南北 0.75m、東西 0.65m のやや長方形を呈し、深さは 0.4m である。



第252図　7次6号土坑

図示できる出土遺物は13点である。第253図1167は平底の壺底部、1168から1171は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1172と1173は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕で、1173には頸部下に一条の沈線が廻る。1174は平底の甕底部、1175は二つの孔を穿った取っ手、1176は頸部に穿孔を持つ小型の壺である。1177は錆のため器種が不明な鉄器で、残存長6.5cm、幅2.6cmである。1178は砂岩製の石剣、1179は粘板岩製の磨製片刃石斧である。これらの内、6号Aからの出土は1168、1170、1171、1173、1174、1177、1179で、残りは6号B出土である。

この土坑の時期は6号AがⅡ期（中期初頭～前葉）、6号BがⅢ期（中期中頃）と考えられる。他の土坑の時期は不明である。



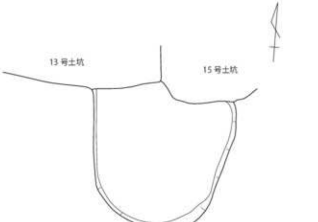
第 253 図　７次６号土坑出土遺物

8）７号土坑（第 254 図）

調査区南東部で確認された土坑である。13 号、15 号土坑に切られている。南北 1.13m 以上、東西 1.13m で、深さは 0.32m である。

図示できる出土遺物は４点である。第 255 図 1180 は「く」字に折れる甕で、胴部はあまり張らない。1181 は一条の刻目突帯が廻る下城式土器甕、1182 は平底の甕底部である。1183 は凝灰岩製の砥石である。

この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）であろう。

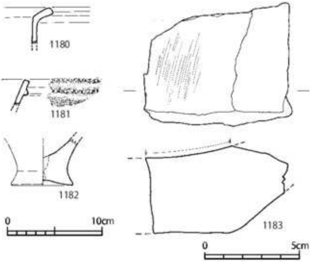


第 254 図　７次７号土坑

9）８号土坑（第256図）

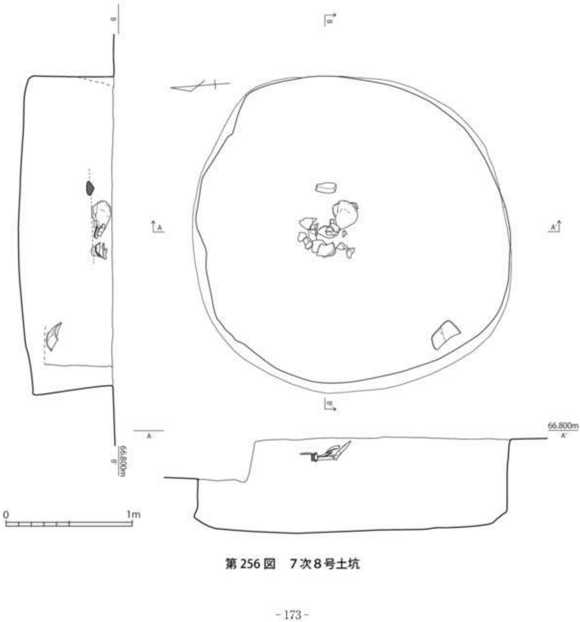
調査区南側の中央付近で検出された土坑である。上端、下端とも 2.50m のほぼ円形を呈し、深さは中央部付近で 0.75m である。断面形状はほぼ垂直、あるいはやや内傾して立ち上がる袋状土坑である。遺物は検出面近くに浮いた状態で出土している。

図示できる出土遺物は 13 点である。第 257 図 1184 は３本一単位の櫛状の工具によって直線文と重弧文を描くが、通常の下城式土器壺と違って、無頸壺の形態を持つ。1185 は頸部に刻目突帯を廻らせる壺で、口縁部は直線的に開く。1186 から 1189 は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1190 は尖底状の底部を持つ甕か。1191 は結晶片岩製の磨製石鏃、1192 は溶結凝灰岩製の石皿、1193 は緑泥片岩製の太型蛤刃石斧、1194 は安山岩製の台石、1195 は凝灰岩製の砥石、1196 は緑泥片岩の石核である。

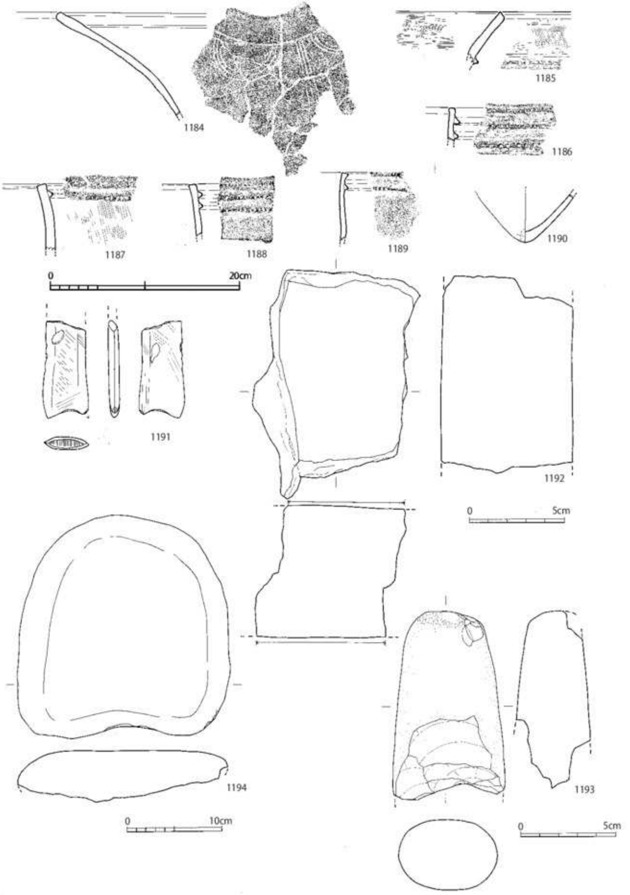


第 255 図　７次７号土坑出土遺物

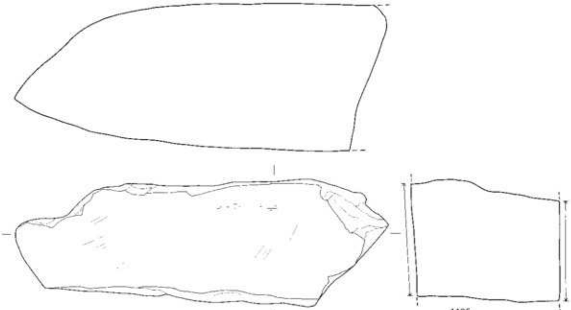
この土坑の時期は 1190 や 1191 の帰属時期が問題となるが、その他はⅠ期（前期後葉～末）からⅡ期（中期初頭）のセットと考えても問題がない。袋状土坑という形態から考えても後期に下るものではなく、1190 などは混入と考えられる。



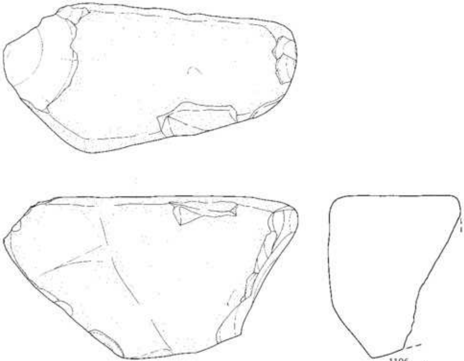
第 256 図　７次８号土坑



第 257 図　7次8号土坑出土遺物①



1195



1196

0　5cm

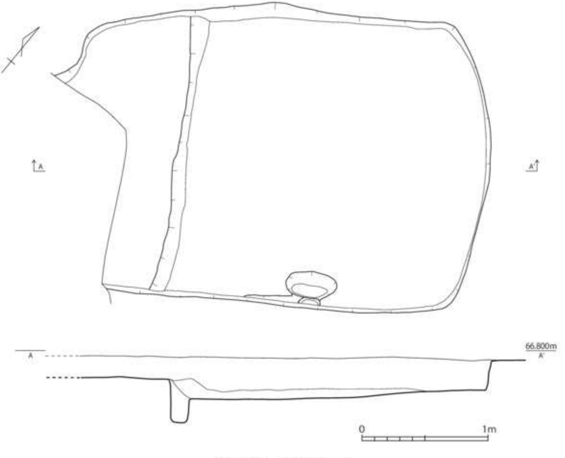
第 258 図　７次８号土坑出土遺物②

10）９号土坑（第 259 図）

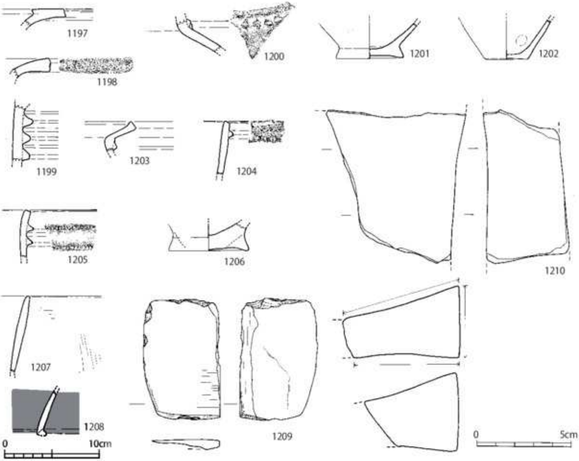
調査区南側で確認された土坑である。略南北方向は 2.38m、略東西方向は 3.20m で、残存する深さは 0.32m である。床面は東側三分の一ほどが高くなっている。54 号土坑を切り、１号竪穴建物に切られている。

図示できる出土遺物は 14 点である。第 260 図 1197 は鋤先状を呈す壺の口縁部、1198 は小さな円形刺突文を口縁部外面に押捺する壺の口縁部、1199 は太い三条の突帯を廻らせる壺、1200 は頸部に一条の突帯を廻らせ、その下位に勾玉状浮文を付す壺、1201 と 1206 は端部が大きく外側に張り出す壺の底部、1202 は平底の壺底部である。1203 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1204 と 1205 は刻目突帯が廻る下城式土器甕、1207 は外面にベンガラが塗布される長頸壺か。1208 はベンガラが塗布され、頸部に一条の突帯を廻らせる壺で、1207 と同一個体かもしれない。1209 は結晶片岩製の磨製石鏃、1210 は砂岩製の砥石である。

この土坑の出土遺物は、Ⅰ期のもの（1201、1206）からⅣ期（中期後葉〜末）からⅤ期（後期初頭）の可能性のあるもの（1200）まであるが、土坑の時期は当然新しい遺物の時期であるⅣ期からⅤ期ということになる。



第 259 図　7 次 9 号土坑



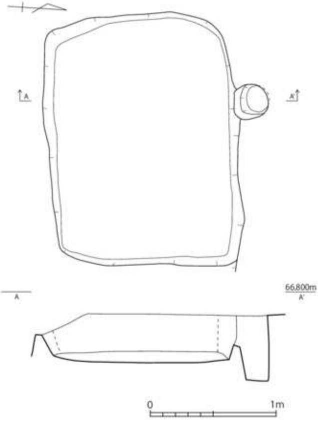
第 260 図　７次９号土坑出土遺物

12）11 号土坑（第 261 図）

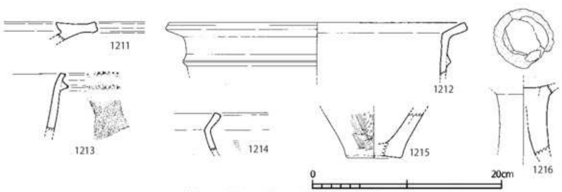
調査区南東部で検出された南北 1.55m、東西 2.00m、深さ 0.38m の長方形を呈する土坑である。

図示できる出土遺物は６点である。第 262 図 1211 は鋤先状口縁の壺、1212 は口縁端部をわずかに肥厚させ、頸部下に一条の突帯を廻らせる東北部九州系の甕である。1213 は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1214 は「く」字に折れる甕、1215 は平底の甕底部、1216 は柱状の脚部の高坏である。

この土坑の時期は、大半の遺物が中期のものであるが、1214 を見れば後期とすることが妥当であろう。



第 261 図　７次１１号土坑

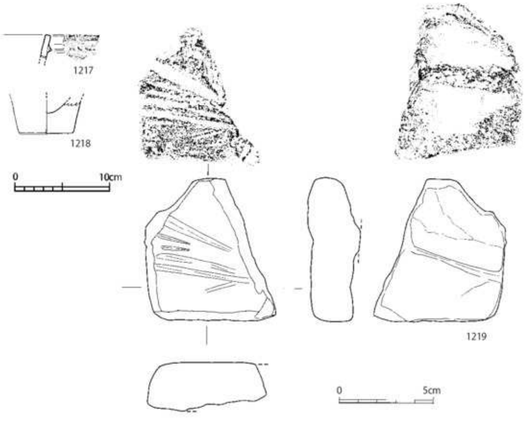


第 262 図　７次１１号土坑出土遺物

13）12 号土坑

「12 号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「12 号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は３点である。第 263 図 1217 は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1218 は平底の甕底部、1219 は凝灰岩製の砥石である。図の左面には幅２～ 5mm ほどの細い磨り跡が５本ある。図の右面は２mm ほどの段差がある。



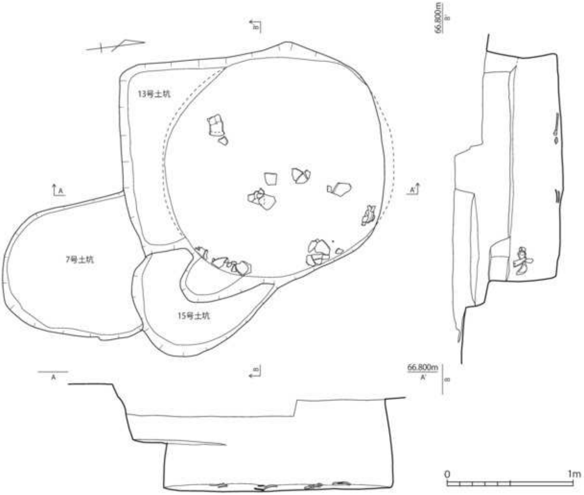
第 263 図　７次１２号土坑出土遺物

14）13 号土坑（第 264 図）

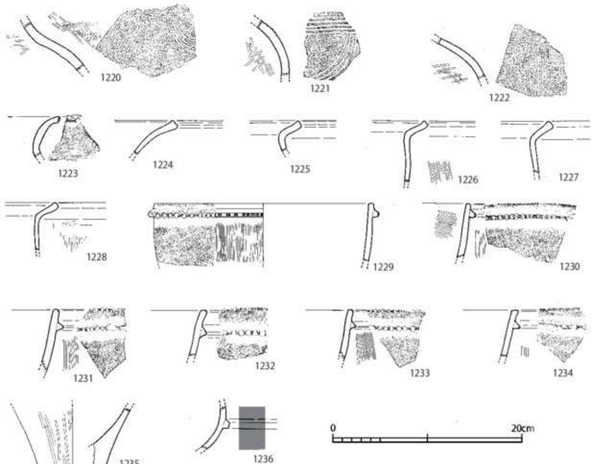
調査区南東部で確認された土坑である。４号、14 号土坑と切り合いを持つが、先後関係は不明である。南北は不明であるが、東西は 1.50m ある方形基調の土坑である。

図示できる出土遺物は 17 点である。第 265 図 1220 から 1223 は半裁竹管による直線文と重弧文を描く下城式土器壺である。1223 の口縁部外面には円形の刺突文があり、細い半裁竹管で３本（６条）の沈線を描く。1224 は大きく開く口縁端部がやや摘み上げられる壺、1226 から 1228 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕である。1229 から 1234 は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1235 は平底の甕底部、1236 は断面台形の突帯を巡らす壺である。

この土坑の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第 264 図　７次１３、１４、１５号土坑



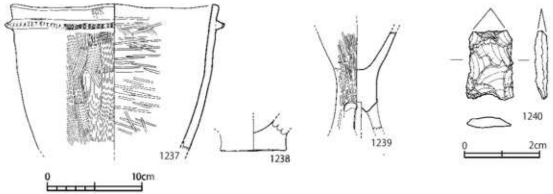
第 265 図　７次１３号土坑出土遺物

15）14 号土坑（第 264 図）

調査区南東部で確認された土坑である。13 号､15 号土坑と切り合うが､先後関係は不明である。上端は直径 1.75m ほどの略円形で、下端は径 1.85m ～ 1.74m の南北にやや長い円形を呈する、断面が袋状の土坑である。遺物は大部分が床面に張り付くように出土している。

図示できる出土遺物は４点である。第 266 図 1237 は一条の突帯を廻らせる下城式土器甕、1238 は平底の壺底部である。1239 は長方形透かしを持つ脚部で、底部の厚さと胴部の開き具合からして 753 のように上部には甕が乗るのではなかろうか。1240 は金山産サヌカイト製の打製石鏃である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第 266 図　7 次１４号土坑出土遺物

16）15 号土坑（第 264 図）

調査区南東部で確認された土坑である。13 号､15 号土坑と切り合うが､先後関係は不明である。南北 1.10m 以上、東西 0.85m、深さは 0.15m の楕円形を呈する土坑になると考えられる。

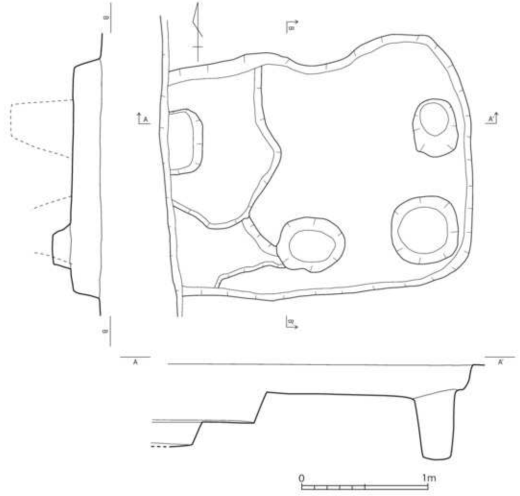
出土遺物はなく、時期は不明である。

17）16 号土坑（第 267 図）

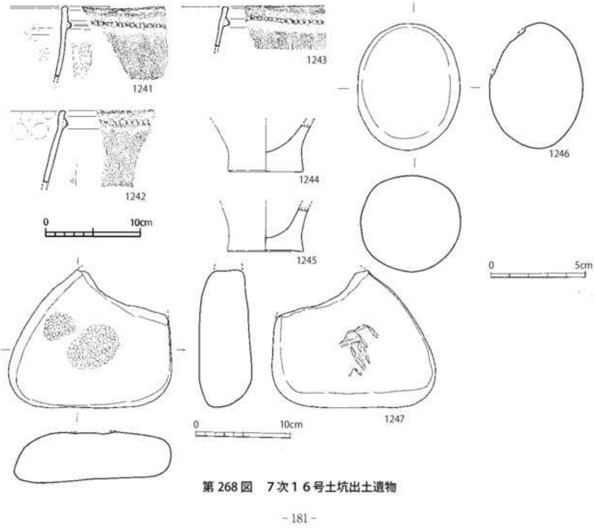
調査区南西角部付近で確認された土坑である。南北 1.93m、東西 2.43m のやや長方形で、深さは 0.23m である。北西側は、床から更に 0.24m 深くなる。

図示できる出土遺物は７点である。第 268 図 1241 から 1243 は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1244 と 1245 は平底の甕底部で、下城式土器甕であろう。1246 は安山岩の投弾で外面は一部被熱して赤化している。1247 は砂岩製の台石である。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第267図　7次16号土坑



第268図　7次16号土坑出土遺物

18) 17号土坑（第269図）

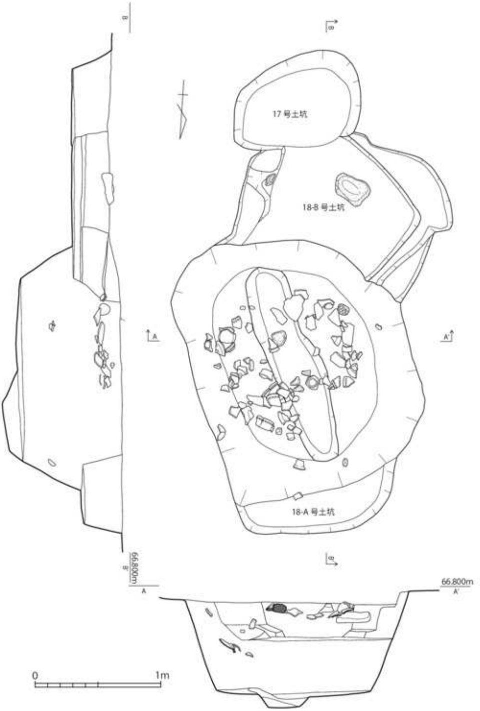
調査区西壁の南寄りで検出された土坑である。18号B土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北0.78（＋α）m、東西1.03mの長楕円形を呈する。深さは0.30mである。

図示できる出土遺物は5点である。第270図1248と1249は刻目突帯が廻る下城式土器甕で、突帯が口縁端部直下にあるという古相を示す。1250は平底の甕底部、1251は焼成後の穿孔がある甕である。内外面から穿孔している。1252は全長0.9cmのクロム白雲母製の管玉で、両側は欠損している。

出土遺物から、この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。

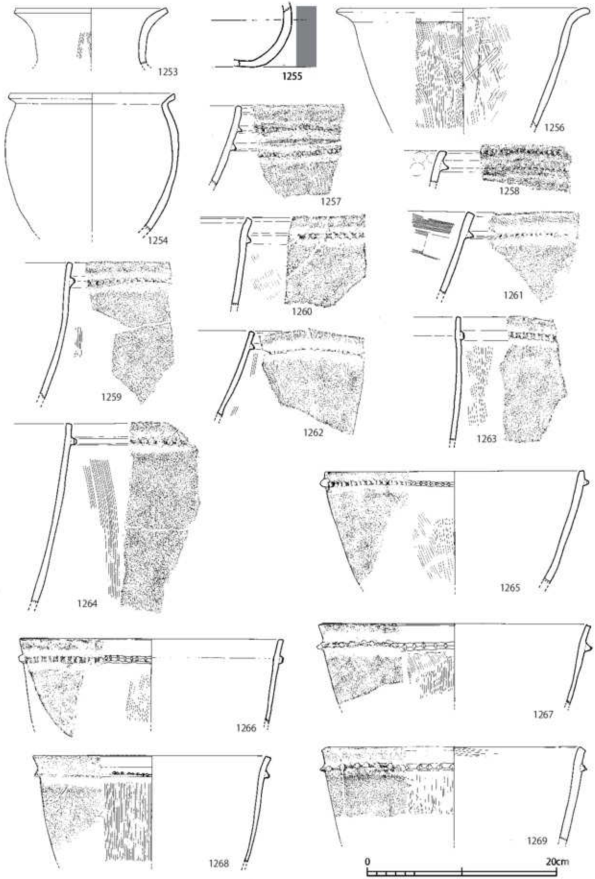
19) 18号土坑（第269図）

調査区西壁の南寄りで検出された土坑である。3基の土坑が切り合っており、中央を18号、北側を18号A、南側を18号Bとする。18号土坑は南北2.10m、東西1.75m、深さ0.80mの大型の長方形を呈する土坑で、床面には幅0.40m、深さ0.07mの溝が掘られている。遺物は大部分が浮いた状態で出土している。18号A土坑は、東西幅1.35m以上、深さ0.32mである。18号B土坑は17号土坑と切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。この土坑も複数切り合っている可能性があるが、いずれも全形、規模ともに不明である。

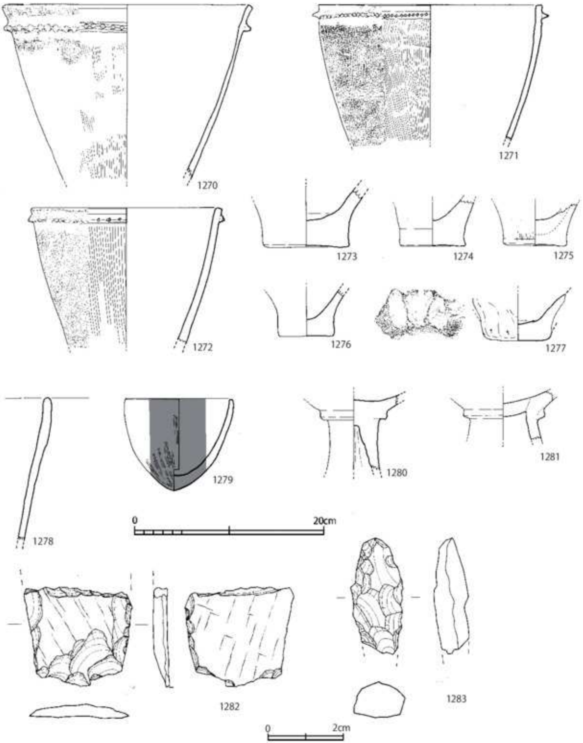


第269図　7次17、18号土坑

第270図　7次17号土坑出土遺物



第 271 図　７次１８号土坑出土遺物①

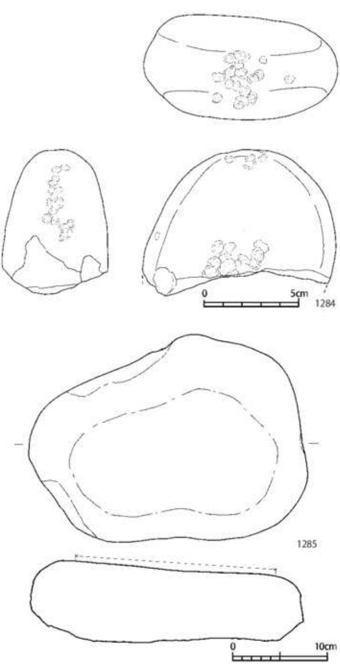


第 272 図　７次１８号土坑出土遺物②

図示できる出土遺物は33点である。第271図1253は口縁部が外反しながら開く壺、1254は口縁部が小さく折れ開く壺、1255は高坏の脚部である。1256から1277は甕で、1256は口縁部が緩やかに開くもの、1257から1272は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。突帯は二条のもの（1257）と一条のものがあり、突帯の位置は1265や1272が比較的高い位置にあるほかは、口縁端部より２cm前後下がる位置にある。基本的に外面ハケ調製、内面はナデ調製である。1273から1277は平底の甕底部で、1277は指頭圧痕が残る。1278は口縁部がまっすぐ伸びる甑、1279は内外面ともベンガラ塗布されたやや尖底の鉢、1280と1281は括れ部に突帯を巡らす高坏で、1281の底部は円盤充填技法で作られている。1282は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1283は姫島産黒曜石製の楔形石器である。第273図1284と1285はいずれも角閃石安山岩製の敲石と台石である。

以上の出土遺物の内、18号Ａに帰属するものは1266と1276で、18号Ｂに帰属するのは1260、1263、1267、1270、1271、1278、1279である。その他は18号土坑出土である。

この土坑の時期は、全てがⅢ期（中期中頃）と考えられる。



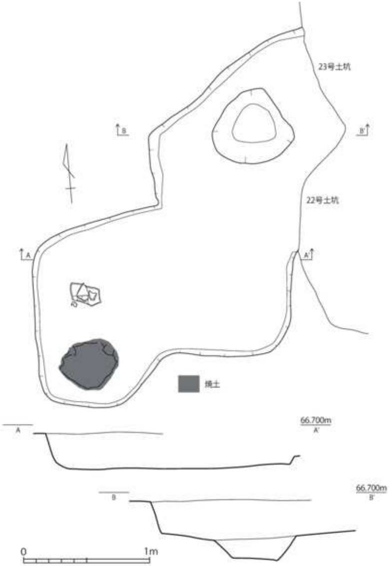
第273図　７次１８号土坑出土遺物③

20）19 号土坑（第 274 図）

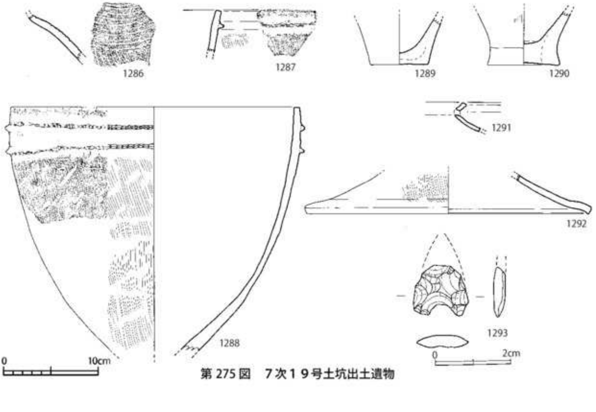
調査区中央やや南東寄りで検出された土坑である。南北 1.10m、東西 1.37m の不定形をしており、深さは 0.28m である。床面近くで焼土が堆積し、炭化した種子（ドングリ類）が出土している。

図示できる出土遺物は 8 点である。第 275 図 1286 は半裁竹管による直線文と重弧文を施す下城式土器壺、1287 と 1288 は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕である。1288 はやや内湾気味の口縁部の下に二条の突帯を廻らせる。1289 と 1290 は平底の甕底部、1291 は頸部に穿孔のある小型の壺、1292 は蓋である。1293 は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）からⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第 274 図　7 次 1 9 号土坑

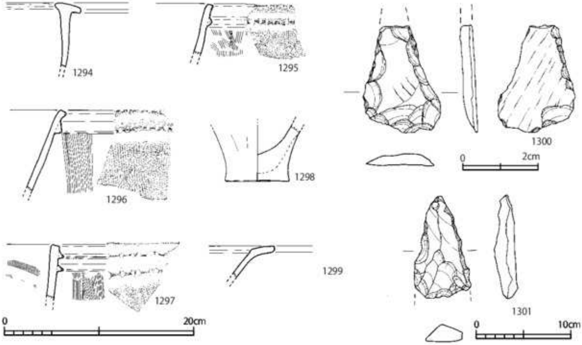


第 275 図　7 次 1 9 号土坑出土遺物

21）20 号土坑

「20 号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「20 号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は８点である。第 276 図 1294 は口縁部がやや厚手の鋤先状を呈する壺、1295 から 1297 は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1298 は平底の甕底部、1299 は「く」字折れて開く高坏の坏部か。1300 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1301 は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

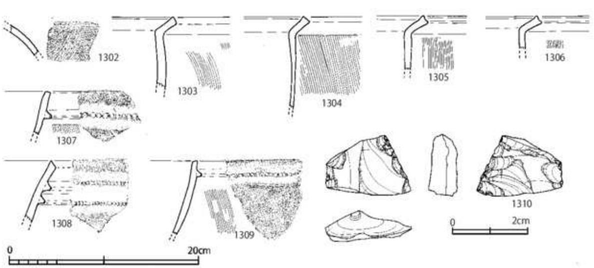


第 276 図　７次２０号土坑出土遺物

22）21 号土坑

「21 号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「21 号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は９点である。第 277 図 1302 は半裁竹管による直線文と重弧文を描く下城式土７壺、1303 から 1306 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、1307 から 1309 は刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕である。1310 は姫島産黒曜石製の二次加工剥片である。



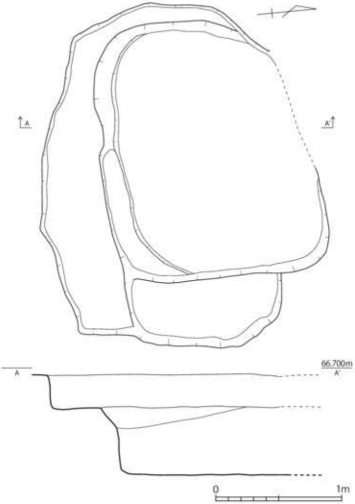
第 277 図　７次２１号土坑出土遺物

23）22号土坑（第278図）

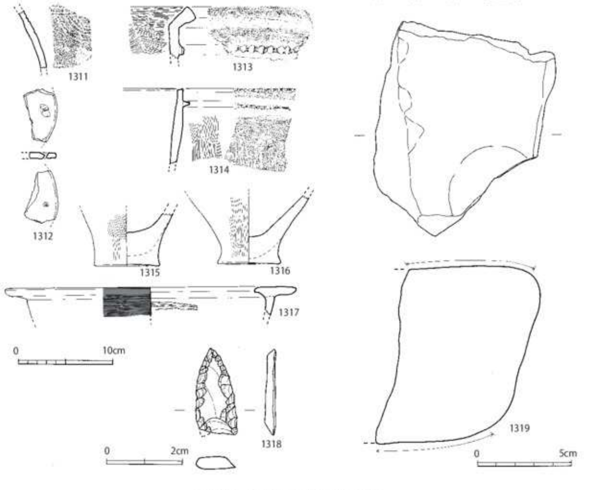
調査区中央やや南東部で検出された土坑である。21号、23号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。規模は、南北1.70m、東西2.05m、深さ0.78mの隅丸長方形である。

図示できる出土遺物は9点である。第279図1311は半裁竹管による直線文と重弧文を描く下城式土器壺、1312は水平に開く壺の口縁部で、穿孔がある。1313は口縁部が強く「く」字形に折れ、その下に刻目突帯文を廻らせる甕で、東北部九州系の甕と下城式土器甕の折衷的な甕である。今回報告する中では1733にも近い。1314は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1315と1316は平底の甕底部である。1317は外面にベンガラを塗布する高坏で、口縁部は鋤先状をなす。1318は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1319は安山岩製の石皿である。

この土坑の時期は、Ⅲ期（中期中頃）と考えられる。



第278図　7次22号土坑



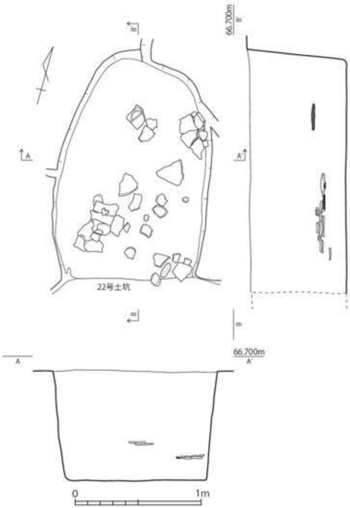
第279図7次22号土坑遺物出土

24）23号土坑（第280図）

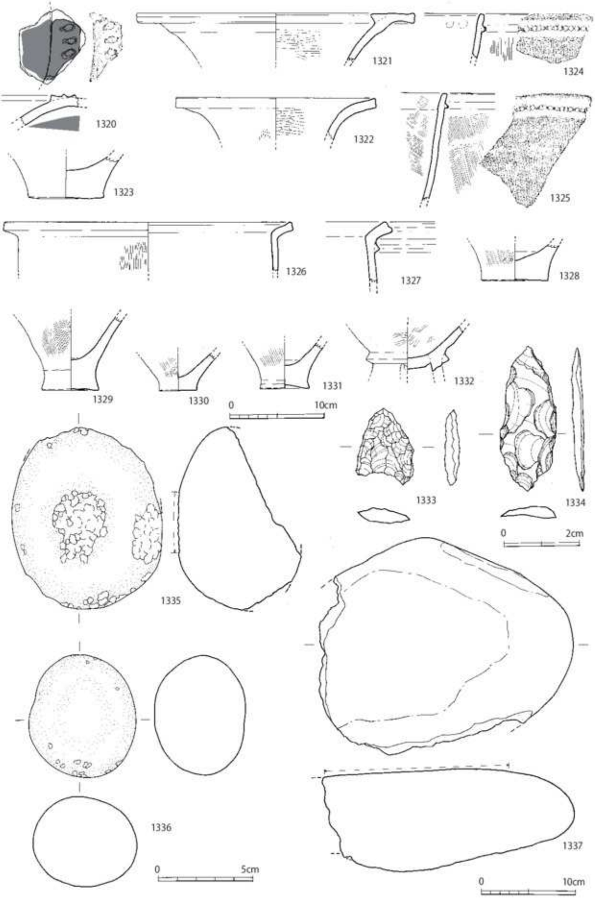
調査区中央からやや南東寄りで検出された土坑である。22号、24号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北は1.90＋α m、東西は1.22mで、深さは0.80mの楕円形を呈する。遺物は床面から0.1mほど浮いた状態で出土した。

図示できる出土遺物は18点である。第281図1320は鋤先状口縁の上面に勾玉状浮文を付す壺、1321は鋤先状口縁の壺、1322は外反しながら開く壺、1323は平底の壺底部、1324と1325は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1326と1327は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕で、1327には一条の突帯が廻る。1328から1331は平底の甕底部。1332は脚部に透かしを持つ高坏で、括れ部に一条の突帯を廻らせる。1333は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1334は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1335は安山岩製の凹石、1336は安山岩製の投弾、1337は角閃石安山岩製の台石である。

この土坑の時期は、Ⅲ期（中期中頃）と考えられる。



第280図　7次23号土坑



第 281 図　7 次２３号土坑出土遺物

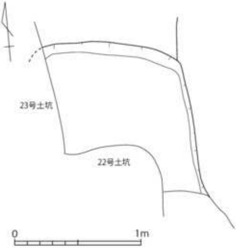
25）24号土坑（第282図）

調査区中央やや東南東で検出された土坑で、22号、23号、30号土坑に切られている。そのため、本来の規模、形状は不明である。残存する深さは0.79mである。

図示できる出土遺物は2点である。第283図1338は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1239は平底の甕底部である。

出土遺物が少なく、時期を決めるのは難しいが、Ⅲ期と考えられる22号土坑や23号土坑に切られているので、少なくともⅢ期（中期前半）以前であることは間違いない。1342からⅡ期（中期初頭）と考えておきたい。

第283図　7次24号土坑出土遺物

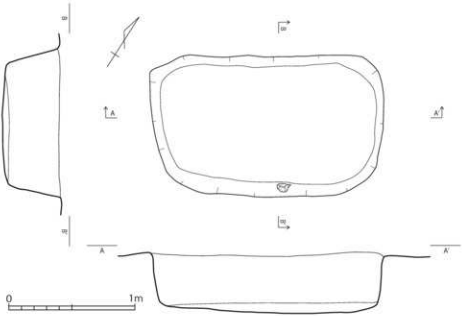


第282図　7次24号土坑

26）25号土坑（第284図）

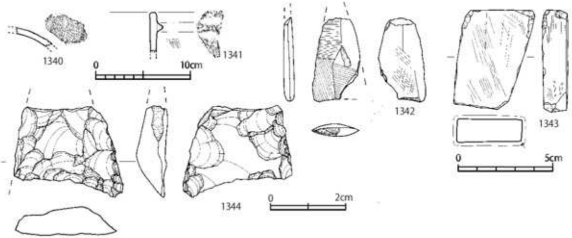
調査区中央南寄りで検出された土坑である。7号竪穴建物を切っている。規模は南北1.15m、東西1.15mで、深さ0.45mの長方形を呈する土坑である。

図示できる出土遺物は5点である。第285図1340は半裁竹管による直線文を描く下城式土器壺、1341は一条の刻目突帯文を廻らせる下城式土器甕、1342は結晶片岩製の磨製石鏃、1343は砂岩製の砥石、1344は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。



第284図　7次25号土坑

この土坑の時期は、遺物が少なく確定できないが、少なくとも7号竪穴建物のⅡ期（中期初頭）以降である。



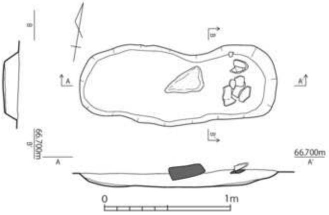
第285図　7次25号土坑出土遺物

27）26 号土坑（第 286 図）

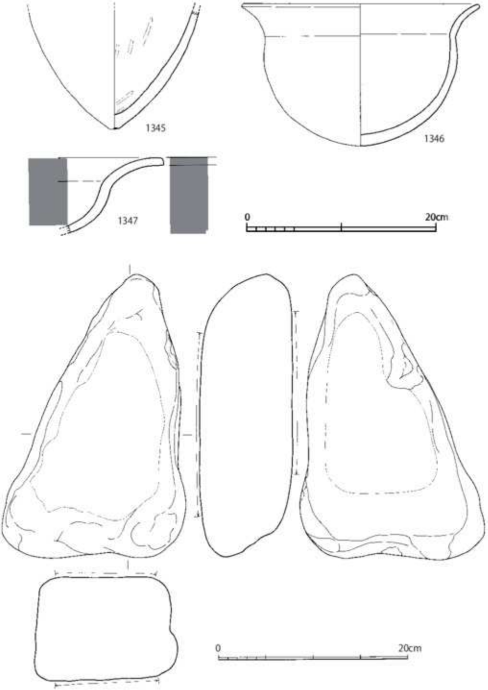
調査区中央やや南西側で検出された土坑である。規模は南北 0.60m、東西 1.56m の隅丸長方形で、残存する深さは中央付近で 0.12m である。床面は東西断面では皿状を呈す。

図示できる出土遺物は 4 点である。第 287 図 1345 は僅かに上げ底状の小さな底部の甕、1346 は丸底の鉢、1347 は内外面にベンガラを塗布する高坏で、口縁部は外反しながら大きく開く。1348 は安山岩製の石皿である。

この土坑の時期は、Ⅷ期（後期後葉）と考えられる。



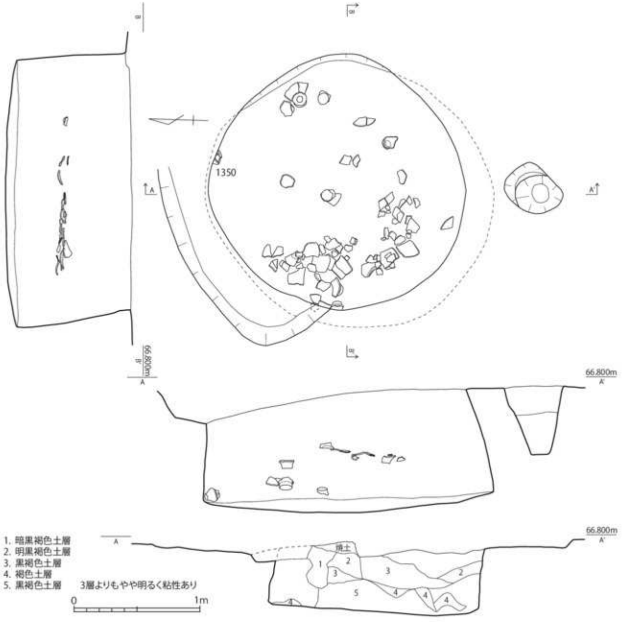
第 286 図　7 次 2 6 号土坑



第 287 図　7 次 2 6 号土坑出土遺物

28）27 号土坑（第 288 図）

調査区南西部で検出された土坑である。3 号竪穴建物に切られている。上端の直径は 2.03m の円形、下端は径が 2.30m ～ 2.10m のやや楕円形を呈する。残存する深さは 1.0m で、断面は袋状を呈する。遺物は 1350 が壁際床面直上で出土した他は、堆積土の中位から出土している。

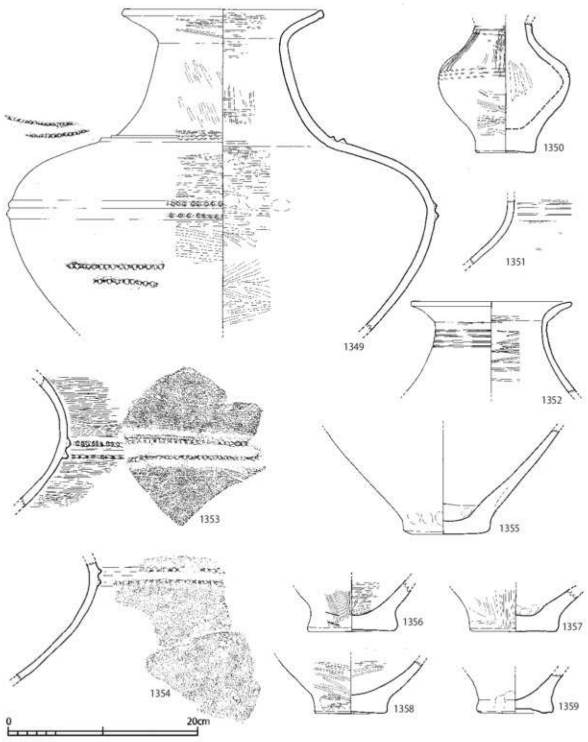


第 288 図　7 次 2 7 号土坑

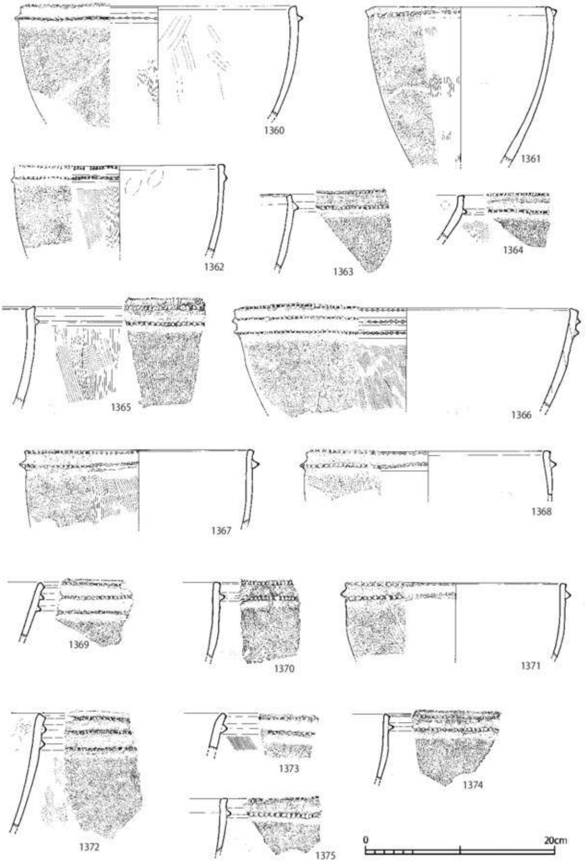
図示できる出土遺物は 36 点である。第 289 図 1349 は口縁部と頸部、体部の境が明瞭な壺で、頸部と体部の境には二条の刻目突帯文を廻らせ、胴部最大径の部分にも二条の刻目突帯文を廻らせる。内外面ともヘラミガキされている。1350 は小型の壺で、頸部と体部の境と、体部の最大径の部分に三条の沈線を廻らせ、それを縦の三条の沈線でつなぐ。外面はヘラミガキ。1351 は体部に三条の沈線を廻らせる壺、1352 はやや肥厚させる口縁部から頸部上半部分に四条の沈線を廻らせる壺。1353 と 1354 は 1349 と同様の壺で、二条の刻目突帯を廻らせる。1353 は突帯の下部に一条の沈線を廻らせ、内外面ともヘラミガキされているが、1354 は摩耗が激しく確認できない。1355 から 1359 は壺の底部で、1355 円盤状の底部をなす。1356 も裾がやや外に張り出す。1358 は内外面ともヘラミガキが施される。第 290 図 1360 から 1375 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、突帯の位置が比較的口唇部に近いものが多く、極端に下がるものはない。二条の突帯を持つものも、比較的口唇部に近い部分に廻らせている。第

291 図 1376 から 1380 は平底の甕底部である。1381 から 1383 は姫島産黒曜石製で、1381 は打製石鏃、1382 は石匙、1383 は二次加工剥片である。1384 は厚さ 2.5mm で、残存長 6.6cmの円盤状の粘板岩で、図の矢印で示す間は磨かれている。表裏面は加工は見られないが平滑である。用途は不明。

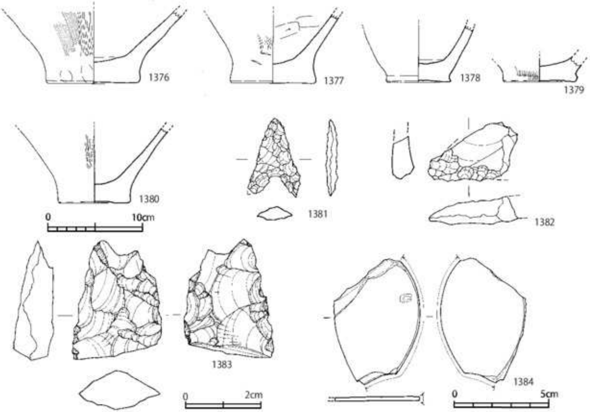
この土坑の時期はⅠ期（前期後葉～末）である。



第 289 図　7次２７号土坑出土遺物①



第 290 図　7 次２７号土坑出土遺物②

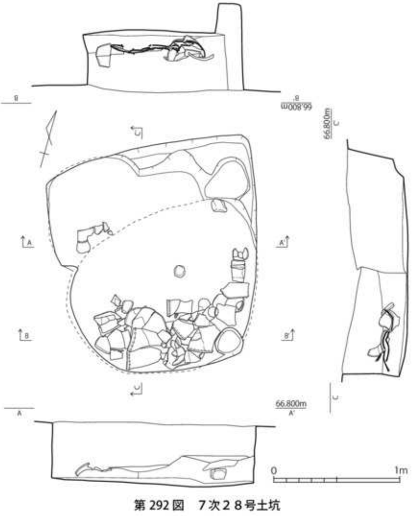


第 291 図　７次２７号土坑出土遺物③

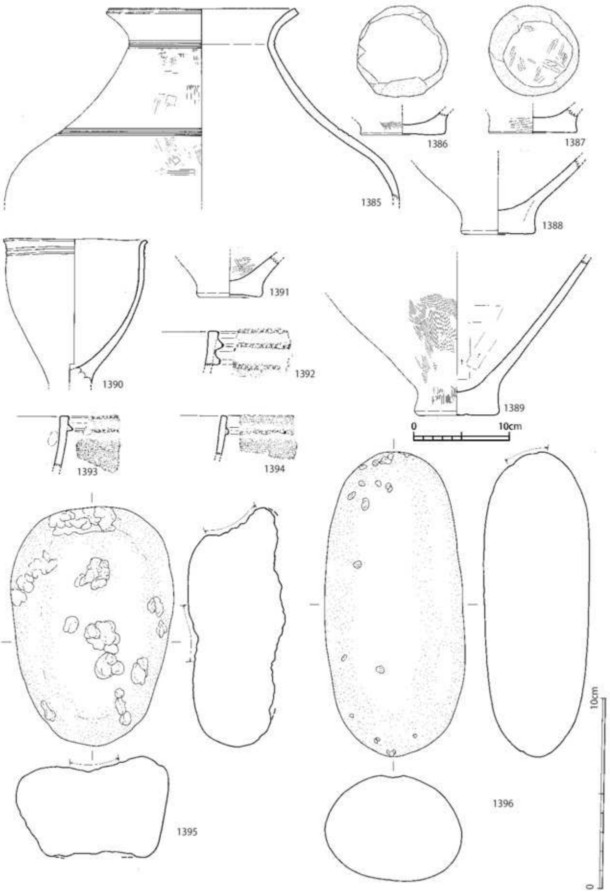
29) 28 号土坑（第 292 図）

調査区中央からやや南西寄りで検出された土坑である。長方形の土坑と円形土坑が切り合っているが、同一番号で取り上げている。長方形の方は、長軸 1.65m、短軸推定で 0.8m、深さは 0.44m で、円形の方は上端の長軸 1.60m、短軸推定で 1.28m のやや不整な楕円形で、残存する深さは 0.48m である。円形の方の壁は垂直か、やや内傾して立ち上がるので、本来は袋状をなしていたことが推測できる。遺物は床面の南側半分で集中的に出土している。

図示できる出土遺物は 12 点である。第 293 図 1385 は口縁部と頸部の間、頸部と体部の境にそれぞれ２本と３本の沈線を入れ、口縁部、頸部、体部の境がなだらかな壺である。外面はヘラミガキされている。1386 と 1387 はいずれも壺の底部で、意図的に割られて円盤状になっている。1388 と 1389 は平底の壺底部で、裾部がわずかに張り出す。1390 は緩やかに小さく開く（如意形）口縁部の甕



第 292 図　７次２８号土坑



第 293 図　７次２８号土坑出土遺物

で、頸部下に二条の沈線を廻らせる。底部は厚い平底になると思われる。1391 は平底の甕底部、1392 から 1394 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、比較的口唇部に近いところに突帯を廻らせる。1395 と 1396 は安山岩で、凹石と敲石である。

この土坑の時期は、Ⅰ期（前期後葉～末）である。

30）29 号土坑（第 294 図）

調査区中央のやや南東部あたりで検出された、南北 1.08m、東西 1.45m、残存する深さ 0.17m の長方形を呈する土坑である。床面には二つのピットがあるが、この土坑に伴うものかどうかは不明である。

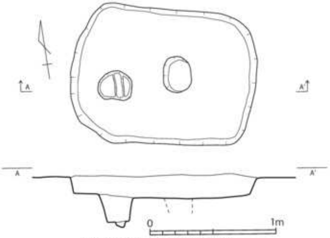
出土遺物はなく、時期の比定はできない。

31）30 号土坑（第 295 図）

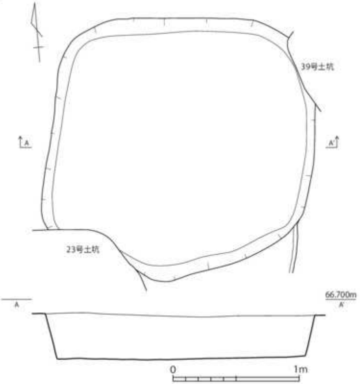
調査区中央のやや南東部あたりで検出された土坑である。23 号土坑に切られ、24 号土坑を切っている。南北 2.05m、東西 2.10m のほぼ正方形を呈し、残存する深さは 0.33m である。壁は開きながら立ち上がる。

図示できる出土遺物は 6 点である。第 296 図 1397 から 1399 は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。いずれも比較的口唇部に近い部分に突帯を廻らせる。1400 は姫島産黒曜石製の打製石鏃、1401 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品、1402 は結晶片岩の剥片である。

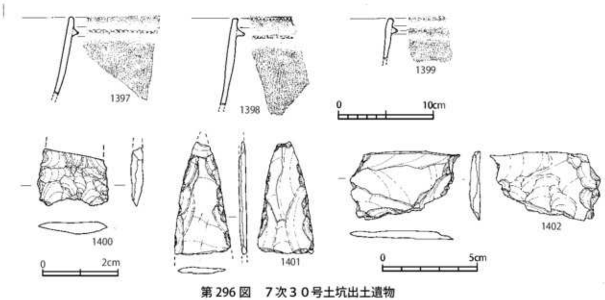
この土坑の時期は、比較的古手の下城式土器甕の存在から、Ⅱ期（中期初頭～前葉）と考えておきたい。



第 294 図　７次２９号土坑



第 295 図　７次３０号土坑



第 296 図　７次３０号土坑出土遺物

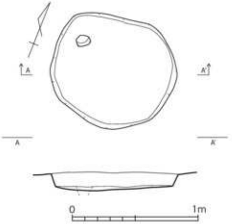
32）31 号土坑（第 297 図）

調査区南西部で、3 号竪穴建物の床面で検出された土坑で、1.00m × 0.92m のやや楕円形を呈する。残存する深さは 0.12m ほどである。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。

33）32 号土坑（第 205 図）

調査区中央やや南寄りで検出された土坑で、7 号竪穴建物に切られている。南北 1.65m、東西 2.56m、深さ 0.25 mの長方形を呈する土坑である。床面には複数のピットがあり、焼土も検出されたが、時期を示すような遺物はなかった。



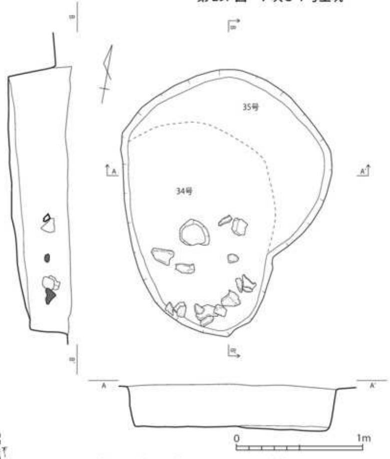
第 297 図　7 次 3 1 号土坑

35）34 号、35 号土坑（第 298 図）

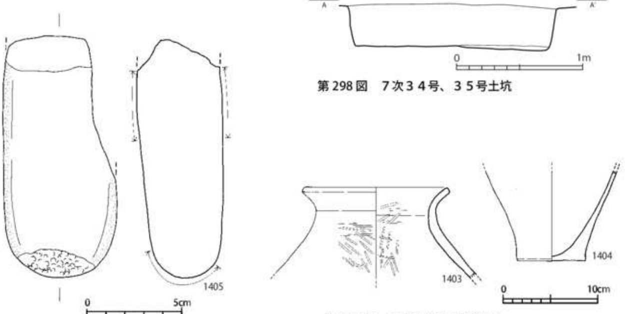
調査区のほぼ中央で検出された土坑である。二つの土坑が切り合っており、北側が 35 号、南側が 34 号である。35 号は 34 号に切られている。35 号は長軸が 1.58m で深さは 0.35m、34 号は長軸が推定 1.70m、短軸が 1.15m で深さは 0.33m である。遺物は B の南側で、床面より浮いた状態で出土している。

34 号出土遺物は 3 点である。第 299 図 1403 は内外面ともヘラミガキが施される板付系統の壺である。1404 は底径の比較的大きな甕の底部で、器表面の調整は摩滅していてわからない。1405 は砂岩製の敲石である。

この土坑の時期は、Ⅰ期（前期後葉～末）と考えられる。



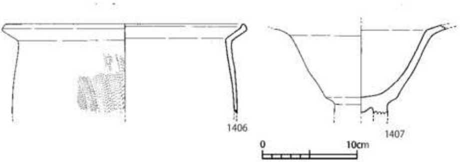
第 298 図　7 次 3 4 号、3 5 号土坑



第 299 図　7 次 3 4 号土坑遺物

35号土坑出土遺物は2点である。第300図1406は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕、1407は底部が平らで、坏部が直線的に開く高坏である。口縁部は外に折れて開く。

この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭）と考えられる。



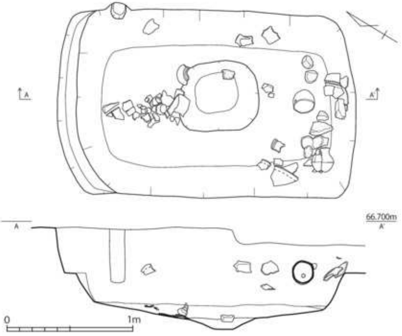
第300図　7次35号土坑出土遺物

38）37号土坑（第301図）

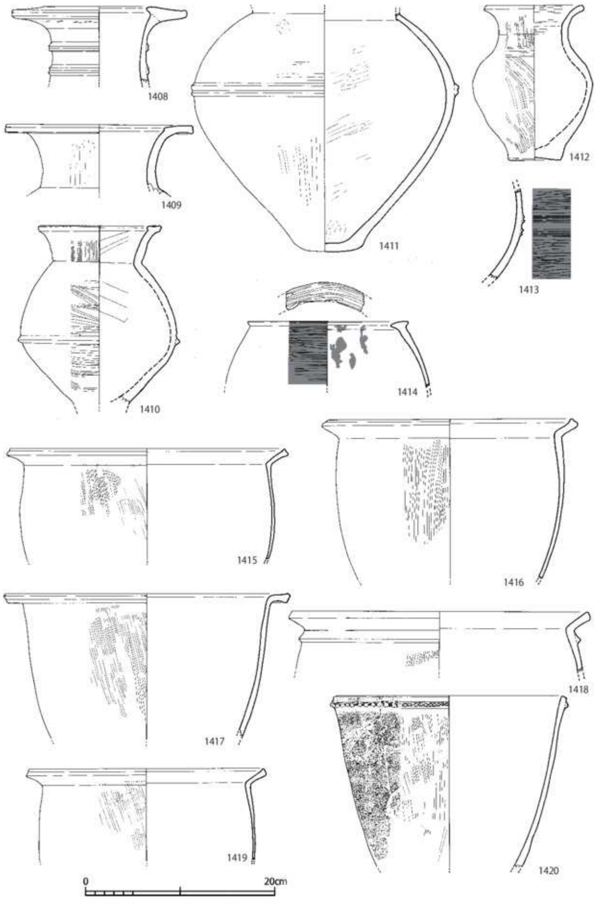
調査区の中央東寄りで検出した土坑である。47号、48号土坑と切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。長軸2.22m、短軸1.48mの長方形を呈し、残存する深さは中央付近で0.70mである。床面は中央付近で一辺0.6m、深さ0.10mほど皿状に窪んでいる。また、北西側は二段掘りとなっている。

図示できる出土遺物は25点である。第302図1408は口縁部が鋤先状になる長頸の壺で、頸部には断面が薄い台形の突帯が二条巡っている。1409は口縁部が鋤先状になる壺である。1410は脚台が付くと思われる壺で。口縁部は小さく鋤先状となる。胴部最大径の部分に一条の突帯を巡らす。1411は胴部に断面台形の突帯を一条巡らす壺で、底部は僅かに突出する平底である。1412は緩やかに外反しながら開く口縁部の壺で、内外面ともヘラミガキが施される。底部は平底である。1413は外面にベンガラが塗布された壺で、ヘラミガキの後二条の突帯を廻らせる。1414は内外面ともベンガラが塗布された無頸壺で、口縁端部は内外に小さく突出する。外面はヘラミガキが施される。1415から1419は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系甕で、1418には頸部下に一条の突帯が廻る。1420は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、第303図1421は平底の甕、1422は縦方向の把手をつける鉢、1423は口縁端部を四角く仕上げる鉢で、内外面ともヘラミガキが施される。1424は平底の鉢で、ミガキはない。1425は台付鉢（高坏）の脚部で、鉢の底部は円盤充填技法である。1426と1427は高坏で、口縁部は両者ともやや内側に突出する逆「L」字形をしており、内外面ともベンガラを塗布し、ヘラミガキが施される。1428は結晶片岩製の磨製石鏃、1429から1432はいずれも姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

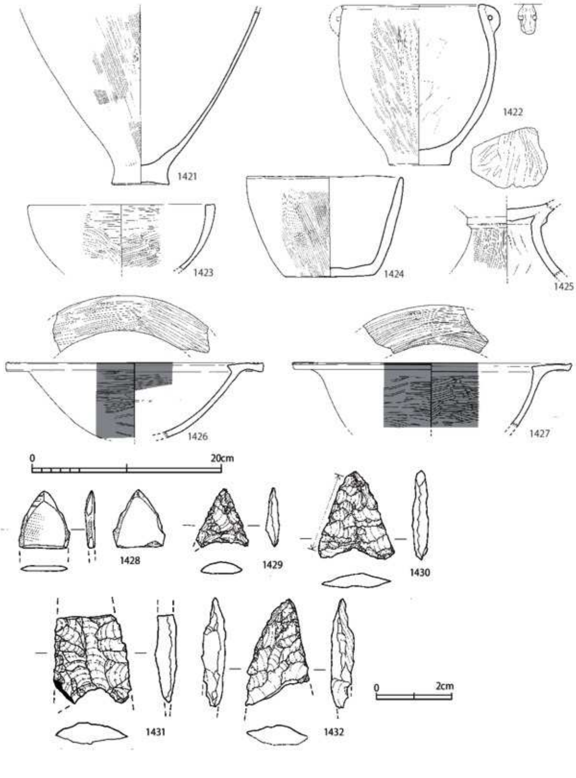
この土坑の時期は、Ⅲ期（中期中頃）と考えられる。



第301図　7次37号土坑



第 302 図　７次３７号土坑出土遺物①



第303図　７次３７号土坑出土遺物②

39）38 号土坑（第 304 図）

調査区のほぼ中央部で検出された土坑で、南北 1.10m、東西 1.50m の楕円形を呈する。残存する深さは 0.32m である。小さなピットと切り合い関係を有するが、先後関係は不明である。

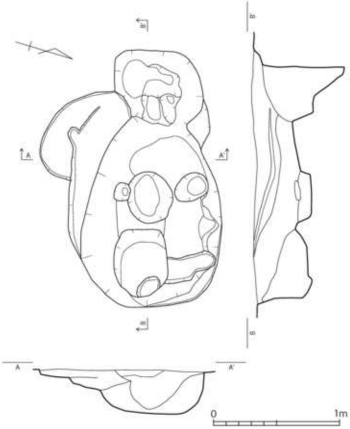
出土遺物はなく、時期の比定はできない。

40）39 号土坑（第 305 図）

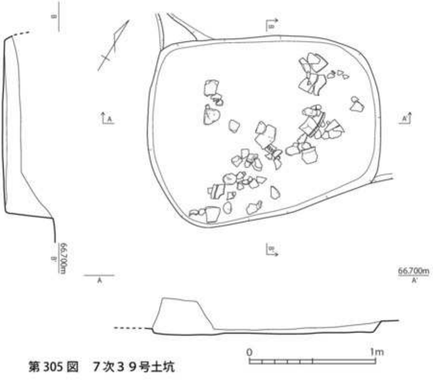
調査区中央やや東南東で検出された土坑で、47 号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北は 1.30 ～ 0.45m、東西は 1.85m のやや台形気味の隅丸長方形を呈する。残存する深さは 0.08m ほどと僅かである。遺物は床面直上で出土している。

図示できる出土遺物は 26 点である。第 306 図 1433 は口縁部外面に三日月型の刺突文を入れ、肩部には半裁竹管で四条（8 本）平行線を廻らせる下城式土器壺、1434 と 1435 も口縁部外面に円形の刺突文を施す。1436 と 1437 は平底の壺底部で、1437 は外面にベンガラが塗布されている。1438 は高台状になる底部で、外面にミガキが施される壺である。1439 から 1443 はゆるやかに「く」字形に折れて開く甕で、いずれも胴部最大径は口径を超えない。1444 から 1450 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、突帯は二条のものと一条のもがある。1447 は口縁部が内傾しながら強く外反して開く。第 307 図 1451 から 1454 は平底の甕底部で、非常に厚いもの（1451）がある。1455 と 1456 は高坏（鉢）の脚部で、1455 には縦長長方形になると思われる透かしがある。1457 は安山岩製の扁平打製石斧、1458 は安山岩製の凹石である。

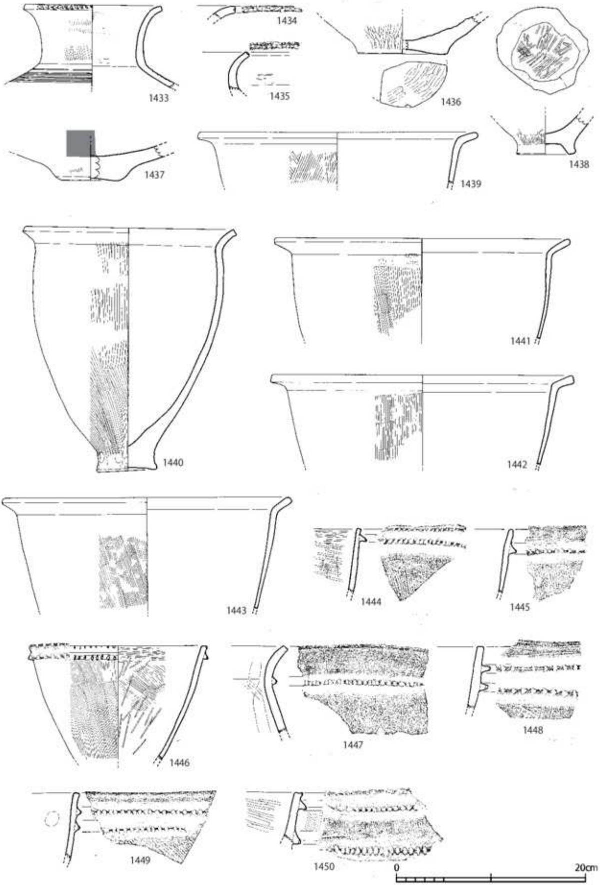
この土坑の時期は、Ⅱ期（中期初頭～前葉）と考えられる。



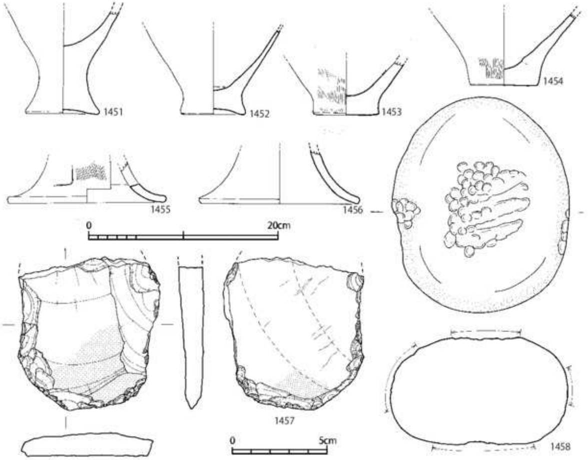
第 304 図　7 次 38 号土坑



第 305 図　7 次 39 号土坑



第 306 図　７次３９号土坑出土遺物①



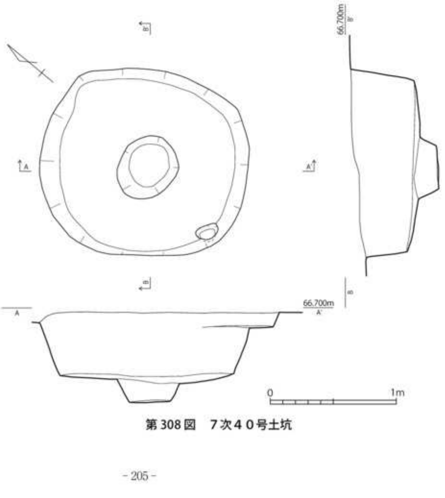
第 307 図　7次３９号土坑出土遺物②

41）40 号土坑（第 308 図）

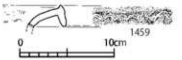
調査区東端の中央付近で検出された土坑である。南北 1.65m、東西 1.48m の隅丸方形を呈し、残存する深さは 0.50m である。床面中央には直径 0.45m、深さ 0.17m のピットがある。

図示できる出土遺物は１点である。第 309 図 1459 は口縁端部を折り返して下方に垂らせ、外面に一条の櫛描波状文を描く安国寺式土器壺である。

図示できた土器が１点のみで遺構の時期を決めがたいが、1459 は Ⅵ 期（後期前葉）のものなので、この土坑の時期は Ⅵ期以降となる。



第 308 図　7次４０号土坑



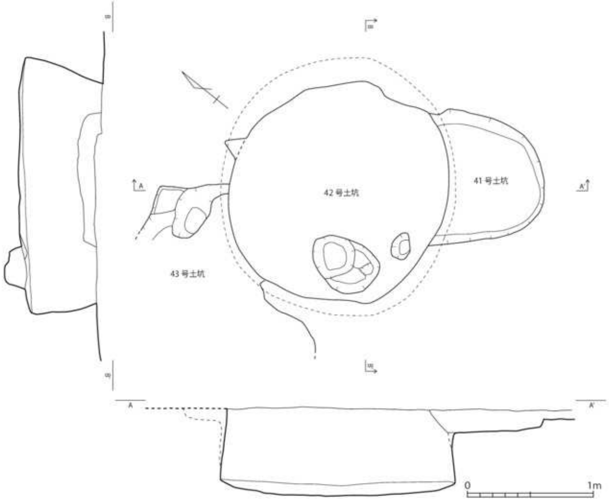
第 309 図　7次４０号土坑出土遺物

42) 41 号土坑（第 310 図）

調査区中央で検出された土坑で、42 号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。略南北は 1.00 + *a* m、略東西は 1·05m で、残存する深さは 0.18m である。

図示できる出土遺物は３点である。第 311 図 1460 は平底の壺底部、1461 は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1462 は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この土坑の時期は中期と考えられるが、出土遺物が少なく細かな時期比定はできない。



第 310 図　7次４１、４２号土坑

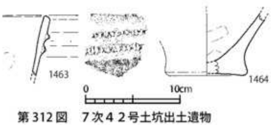
43) 42 号土坑（第 310 図）

調査区中央で検出された土坑で、41 号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。長軸 1.75m、短軸 1.70m のほぼ円形を呈し、深さは 0.70m である。床は袋状に広がり、長軸 2.00m、短軸 1.85m となる。

第 311 図　7次４１号土坑出土遺物

図示できる出土遺物は２点である。第 312 図 1463 は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1464 は平底の甕底部である。

この土坑の時期は中期と考えられるが、出土遺物が少なく細かな時期比定はできない。



第 312 図　7次４２号土坑出土遺物

44）43 号土坑

「43 号土坑」の記載のある遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、ここでは「43 号土坑」出土遺物として扱う。

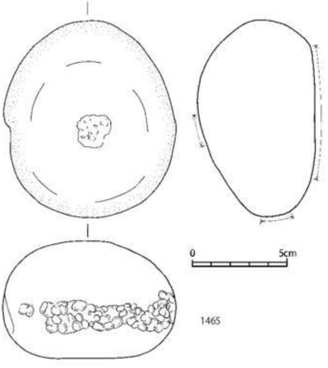
図示できる出土遺物は１点である。第 313 図 1465 は安山岩製の敲石（磨石）である。

46）45 号土坑

「45 号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「45 号土坑」出土遺物として扱う。

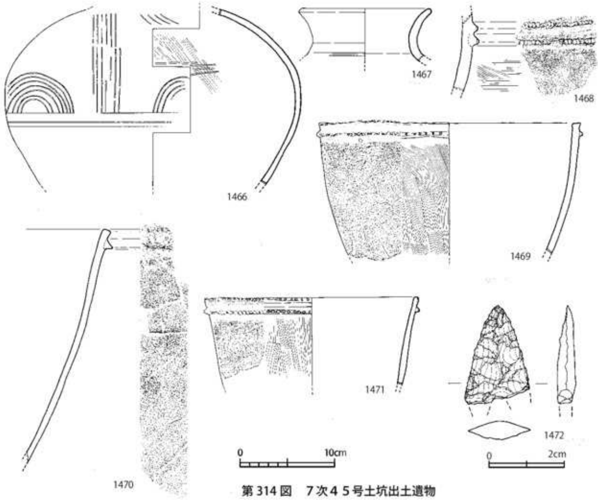
図示できる出土遺物は７点である。第 314 図 1466 は半裁竹管で直線文と重弧文を描く下城式土器壺で、体部は最大径を中位に持つ。1467 は頸部下に現状で二条の沈線を廻らせ、口縁部は緩やかに外反しながら開く壺、1468 は 1353 と同一個体と思われる刻目突帯を二条廻らせる壺、1469 から 1471 は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。突帯は比較的口唇部に近い部分に巡らされる。1472 は姫島産黒曜石製の打製石鏃である。

この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）である。



第 313 図　7次４３号土坑出土遺物

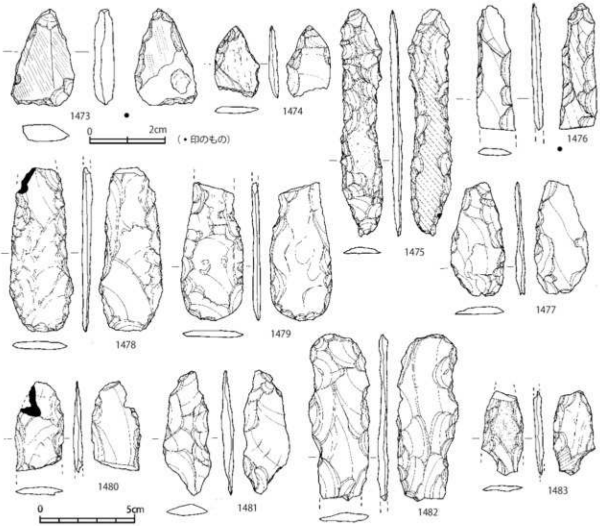
47）46 号土坑



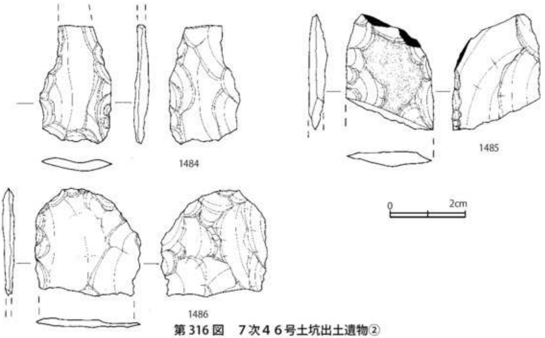
第 314 図　7次４５号土坑出土遺物

「46 号土坑」の記載のある一括遺物である。しかしながら、最終的に遺構と確認できなかったものであるが、一括性を優先して、ここでは「46 号土坑」出土遺物として扱う。

図示できる出土遺物は 14 点である。第 315 図 1473 は安山岩製の磨製石鏃未成品、1474 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品である。1475 から 1486 は同質の暗灰色の安山岩による石器で、一括資料と捉えられる。1475 と 1476 は石槍、1477 から 1486 は石鏃としたが、類例の少ない石器群であり、検討が必要な資料である。



第 315 図　７次４６号土坑出土遺物①



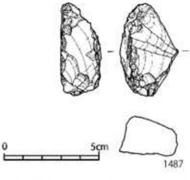
第 316 図　７次４６号土坑出土遺物②

48）47 号土坑（第 317 図）

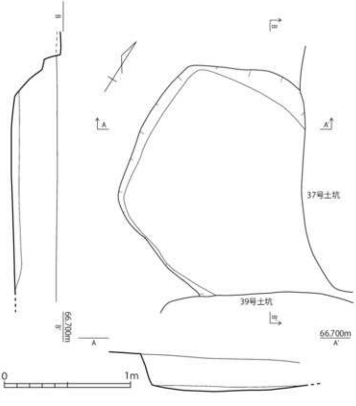
調査区中央やや東寄りで検出された土坑である。37 号、39 号土坑と切り合い関係があるが、先後関係は不明である。南北 1.70m、東西 1.15m ＋ α の隅丸方形を呈し、深さは 0.36m である。

図示できる出土遺物は１点である。第 318 図 1487 は赤褐色をした鉄石英の火打石である。

この土坑の時期は、土器の出土がなく不詳である。



第 318 図　７次４７号土坑出土遺物



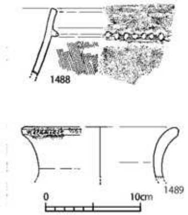
第 317 図　７次４７号土坑

49）48 号土坑（第 319 図）

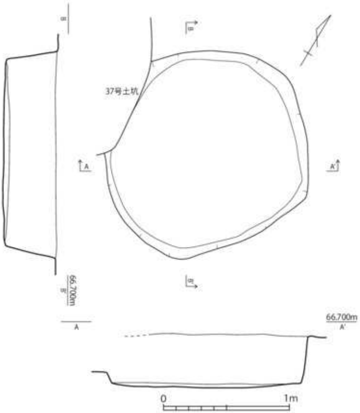
調査区中央東寄りで検出された土坑で 37 号土坑と切り合い関係があるが、先後関係は不明である。長軸 1.65m、短軸 1.57m のほぼ円形を呈し、残存する深さは 0.30m である。

図示できる出土遺物は２点である。第 320 図 1488 は刻目突帯を一条廻らせる下城式土器甕、1489 は爪形の刺突文を口縁部外面に入れる壺である。

出土遺物が少なくて土坑の時期を決めがたいが、土器は中期のものである。



第 320 図　7 次４８号土坑出土遺物



第 319 図　7 次４８号土坑

50）49 号土坑（第 321 図）

調査区東端のやや北よりで検出された土坑である。南北 1.70m、東西 1.20m の長方形を呈する。残存する深さは 0.18m である。床面には浅いピットがある。

図示できる出土遺物は 1 点である。第 322 図 1490 は円形の土器片加工品である。

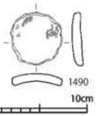
この土坑の時期は不詳である。

51）50 号土坑（第 323 図）

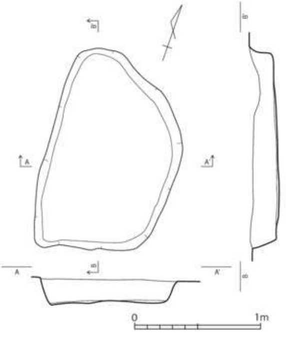
調査区中央から北東寄りで検出された土坑である。南北 1.60m、東西 1.10m の不整な長方形を呈する。残存する深さは 0.18m である。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。

第 321 図　7 次４９号土坑



第 322 図　7 次４９号土坑出土遺物



第 323 図　7 次５０号土坑

52）51 号土坑（第 324 図）

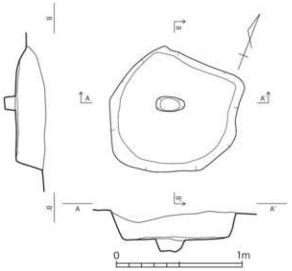
調査区中央から北東寄りで検出された土坑である。東西、南北とも 1.00m の不整な円形を呈する。残存する深さは 0.20m である。

出土遺物はなく、時期の比定はできない。

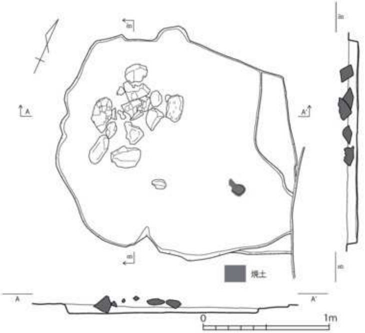
53）52 号土坑（第 325 図）

調査区中央から北寄りで検出された土坑である。南北 1.72m、東西 1.85m の不整な方形を呈し、残存する深さは 0.10m である。

床面からは礫が出土しているが、時期を示す遺物は出土していない。



第 324 図　7 次 5 1 号土坑



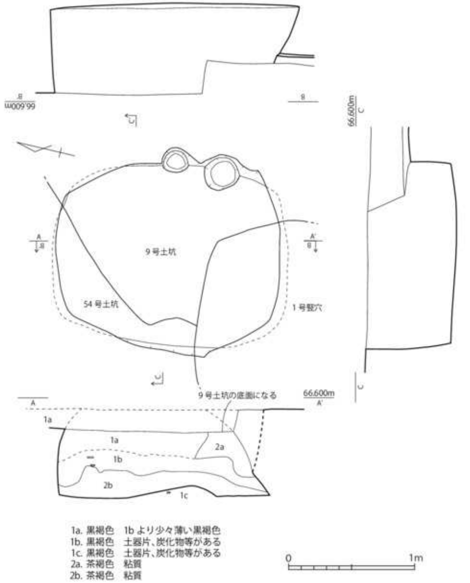
第 325 図　7 次 5 2 号土坑

55）54 号土坑（第 326 図）

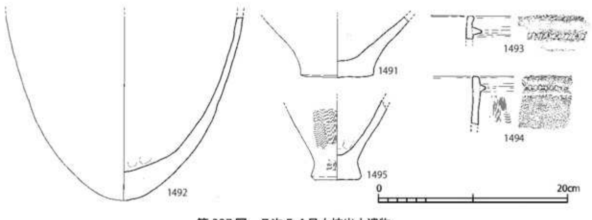
調査区南西部で検出された土坑で、1 号竪穴建物と 9 号土坑に切られている。上端は南北 1.75m、東西 1.47m、下端は南北 1.87m、東西 1.40m のほぼ長方形を呈し、断面は袋状に立ち上がる。残存する深さは 0.72m である。

図示できる出土遺物は 5 点である。第 327 図 1491 は平底の壺底部、1492 は丸底の甕、1493 と 1494 は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1495 はやや外側に踏ん張る形の平底の甕底部である。

この土坑の時期はⅨ期（弥生時代終末）と考えられる。



第 326 図　7 次 5 4 号土坑



第 327 図　7 次 5 4 号土坑出土遺物

56）55 号土坑（第 328 図）

調査区北端の中央付近で検出された土坑である。25 号竪穴建物、58 号土坑と切り合うが、先後関係は不明である。南北 1.20m、東西 1.05m、深さ 0.68m の方形を呈する。遺物は床面近くから出土している。

図示できる出土遺物は 4 点である。第 329 図 1496 と 1497 は平底の甕底部、1498 は二条の刻目突帯を廻らせる

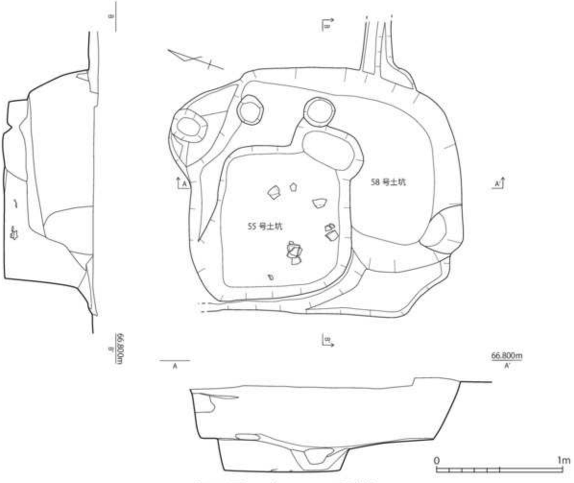
下城式土器甕、1499は脚台の付く鉢で、括れ部分には突帯が廻る。鉢は内外面ともヘラミガキされている。

この土坑の時期を決めるには1499の帰属時期が問題となるが、下ってもⅤ期（後期初頭）と考えられるので、この土坑の時期もⅢ期（中期中頃）からⅤ期となろう。この土坑を切っている25号竪穴建物がⅥ期であることもそれを支持する。

59）58号土坑（第328図）

調査区北端の中央付近で検出された土坑である。25号竪穴建物､55号土坑と切り合うが､先後関係は不明である。南北2.00m、東西1.50mの長方形を呈し、残存する深さは0.45mである。

時期を示す出土遺物がなく、時期比定はできない。



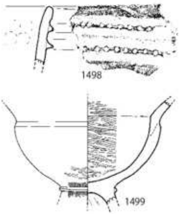
第328図　7次55、58号土坑

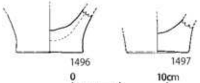
61）60号土坑（第330図）

調査区西端のやや南寄りで検出された土坑である。西側は調査区外に延びるため、東西の規模は分からない。南北は1.58mで、深さは0.15mである。床面からやや浮いて遺物が出土している。

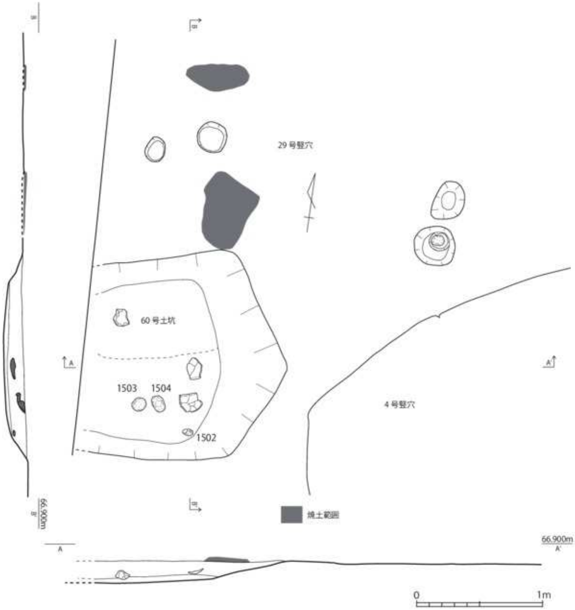
図示できる出土遺物は5点である。第331図1500は胴部最大径を上位に持つやや上げ底気味の平底の甕、1501は平底の甕底部である。1502は蛇紋岩製の石錘、1503と1504は安山岩製の敲石である。

この土坑の時期は、土器が少なく決めがたいが、Ⅲ期（中期中頃）と考えておきたい。

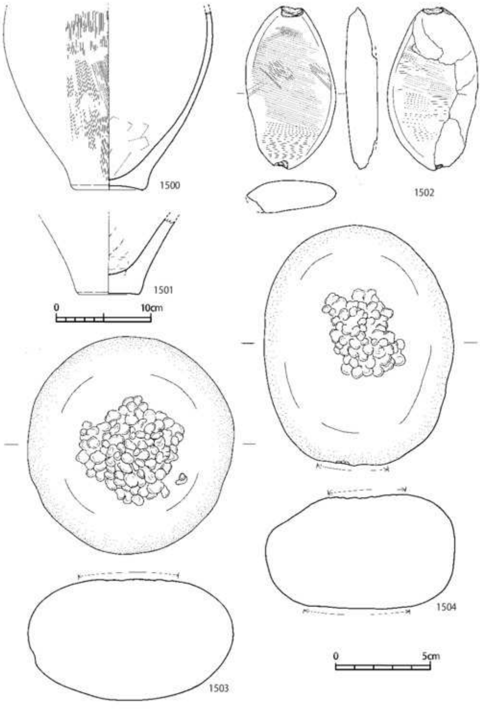




第329図　7次55号土坑出土遺物



第 330 図　7 次 6 0 号土坑



第 331 図　７次６０号土坑出土遺物

62）１号住西土坑（第 333 図）

調査区の南西端で確認された土坑で、溝に切られて半分以上が壊されている。床面の直径は 2.45m、残存する深さは 1.10m、上端で 1.3m 程度と考えられる。

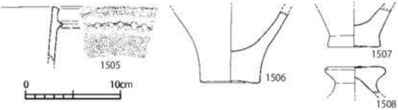
出土遺物はなく、時期は不明である。

62）９号住東南土坑（第 209 図）

調査区中央やや西寄りで検出された土坑である。９号竪穴建物と切り合うが､先後関係は不明である。南北 1.00m、東西 0.78m、深さ 0.10m の楕円形を呈する。北側はピットにより壊されている。

図示できる出土遺物は４点である。第 332 図 1505 は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1506 と 1507 は平底の甕底部、1508 は摘みの付いた蓋である。

この土坑の時期は、Ⅲ期（中期中頃）と考えられる。



第332図　7次9号住東南土坑出土遺物

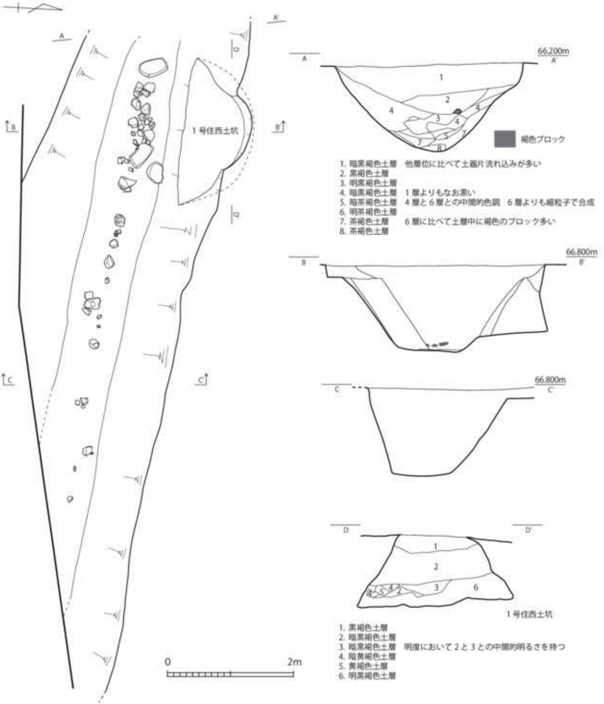
溝

1）2号溝（第333図）

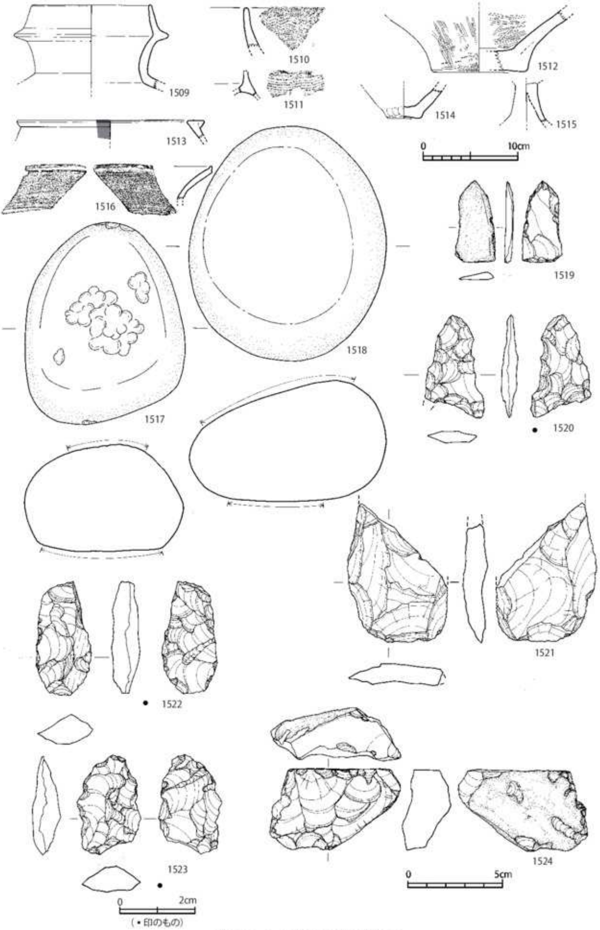
調査区の南西端で確認された略東西方向に直線的に伸びる溝である。1号竪穴建物を切っている。幅2.55m前後、深さは1.36m前後である。断面形は箱形を呈し、底面の幅は0.9m～1.0mである。土層図を見ると、最低一度の掘り直しが認められる。堆積土は北側からの流入が多い。

図示できる出土遺物は23点である。このうち第334図1525から1531は2号竪穴建物として取り上げた一群で、上層出土遺物である。1525と1526は半裁竹管で平行線を描く下城式土器壺である。1527は三条の突帯を廻らせる壺の体部、1528と1529は刻目突帯を巡らす下城式土器甕である。1530は貫通する孔があいている。1531は凝灰岩製の石皿である。1509から1511は安国寺式土器壺で、口縁部上半はあまり長くは伸びない。1512は内外面ともよくヘラミガキされた平底の壺底部、1513は口縁端部を小さく外側に張り出す壺で、内外面ともベンガラが塗布されている。1514はやや上げ底気味の平底の甕底部、1515は裾が大きく開く高坏の脚部である。1516は口縁端部内外面に沈線が廻る縄文晩期土器の浅鉢である。1517と1518は安山岩製の磨石、1519と1520は磨製石鏃未成品で、1519は結晶片岩、1520はガラス質安山岩である。1521は粘板岩製の扁平打製石斧、1522と1523は姫島産黒曜石製の二次加工剥片、1524は姫島産黒曜石製の石核である。

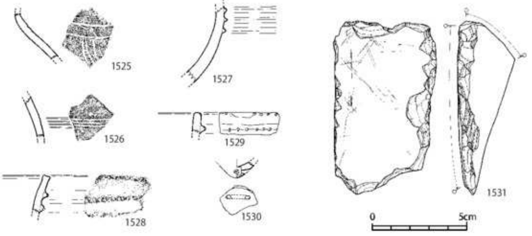
この溝の時期は、図示した遺物からだけだと時期を決めがたいが、この溝が切っている1号竪穴建物がⅨ期と考えられることから、Ⅸ期以降であるのは間違いない。そうすれば、1510の安国寺式土器の口縁部は大きく伸びるものかもしれない。


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
1 号住西土坑
66.200m
66.800m
66.800m
褐色ブロック
1. 暗黒褐色土層　他層位に比べて土器片流れ込みが多い
2. 黒褐色土層
3. 明黒褐色土層
4. 暗黒褐色土層　1 層よりもなお黒い
5. 暗茶褐色土層　4 層と 6 層との中間的色調　6 層よりも細粒子で合成
6. 明茶褐色土層
7. 茶褐色土層　6 層に比べて土層中に褐色のブロック多い
8. 茶褐色土層
1. 黒褐色土層
2. 暗黒褐色土層
3. 暗黒褐色土層　明度において 2 と 3 との中間的明るさを持つ
4. 暗黄褐色土層
5. 黄褐色土層
6. 明黒褐色土層
0
2m

第 333 図　7 次 2 号溝



第 334 図　7 次 2 号溝出土遺物①



第 335 図　７次２号溝出土遺物②

（３）その他の遺物

ここでは、遺構に伴わないで出土した遺物について説明する。第 336 図 1532 は半裁竹管で直線文を描く下城式土器壺、1533 は鋤先状口縁部を持つ壺で、頸部には断面が薄い台形の突帯が廻る。1534 は頸部に三条の断面が薄い台形の突帯が廻る壺、1535 と 1537 から 1539 は口縁部上半に櫛描波状文を描く安国寺式土器壺、1536 と 1542 は体部にベルト状突帯が廻る安国寺式土器壺、1540 は壺の肩部で、浅い重弧文様の曲線と、×印のような文様をヘラ描きする。1732 に近い文様か。1541 は頸部に廻る突帯を指で摘んで凹凸をつける壺、1543 は三条の突帯を廻らせる壺である。1544 から 1552 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、1553 は平底の甕底部、1554 は小さな上げ底の甕底部である。第 337 図 1555 は蓋、1556 は口縁部を外反しながら開く壺、1559 は脚、1558 は逆Ｌ字形に折れて開く口縁部に穿孔を持つ壺、1559 は低い脚台、1560 は口縁部が外形して伸びる平底の鉢、1561 は小さな平底を持つ鉢か。1562 から 1564 は壺の底部、1565 と 1566 は縄文土器で、1565 は後期、1566 は手向山式土器。1567 から 1571 は須恵器で、1567 は口径 8.9cmの坏蓋で天井部は回転ヘラケズリ、1568 は口径 9.3cmの坏身で底部は回転ヘラケズリ、1569 は口縁端部に段を持つ壺、1570 は口縁端部を外側に折り返して肥厚させる壺、1571 は𤭯である。

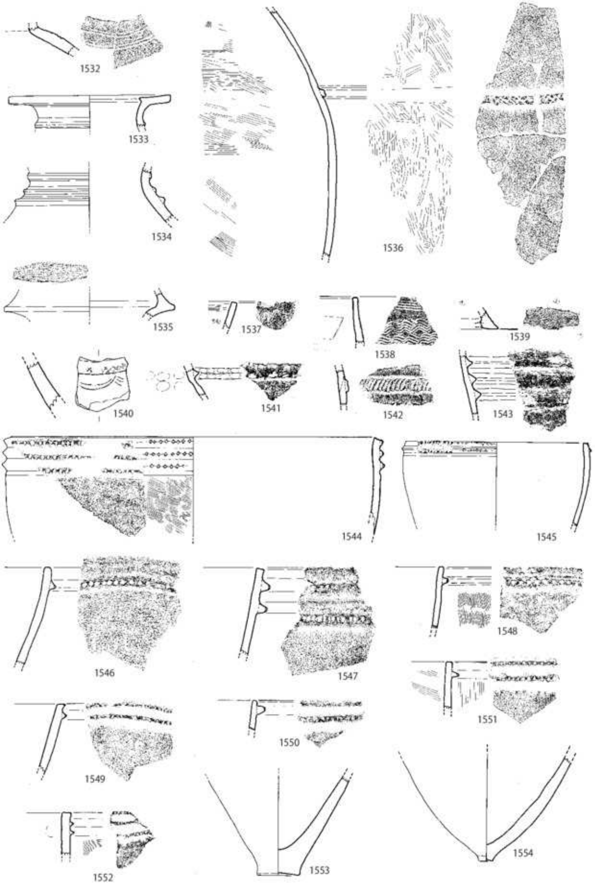
1572 から 1577 は鉄器で、1572 は刃幅 4.2cmの板状鉄斧、1573 は刀子、1574 から 1576 は鉄鏃、1577 は断面が正方形に近い茎を持つ鉄鏃、または鉇か。残存長 9.6cm。1578 はクロム白雲母製の小玉で、直径は 0.5cmである。

1579 から 1607 は石器である。1579 から 1581 は頁岩製の柱状片刃石斧で、1579 と 1581 には抉りが入る。1582 は粘板岩（？）製の石包丁で４か所に孔があいている。1583 と 1584 は安山岩製の磨製石鏃、1585 と 1592 は結晶片岩製の磨製石鏃未成品である。1586 から 1590 までは打製石鏃で、1586 はサヌカイト、1589 はチャート、その他は姫島産黒曜石製である。1591 は姫島産黒曜石の火打石、1593 から 1595 は砥石で、1592 は凝灰岩、1594 は砂岩、1595 は粘板岩でできている。第 339 図 1596 と 1597 は姫島産黒曜石で、1596 は二次加工剥片、1597 は石核である。1598 は角閃石安山岩の台石、1599 は角閃石安山岩の磨石、1600 は凝灰岩の砥石、第 340 図 1601 は角閃石安山岩の台石、1602 は角閃石安山岩の敲石、1603 は粘板岩の磨石、1604 は凝灰岩の石錘か。1604 は角閃石安山岩の敲石、1606 は砂岩の敲石（磨石）、1607 は安山岩製の台石である。

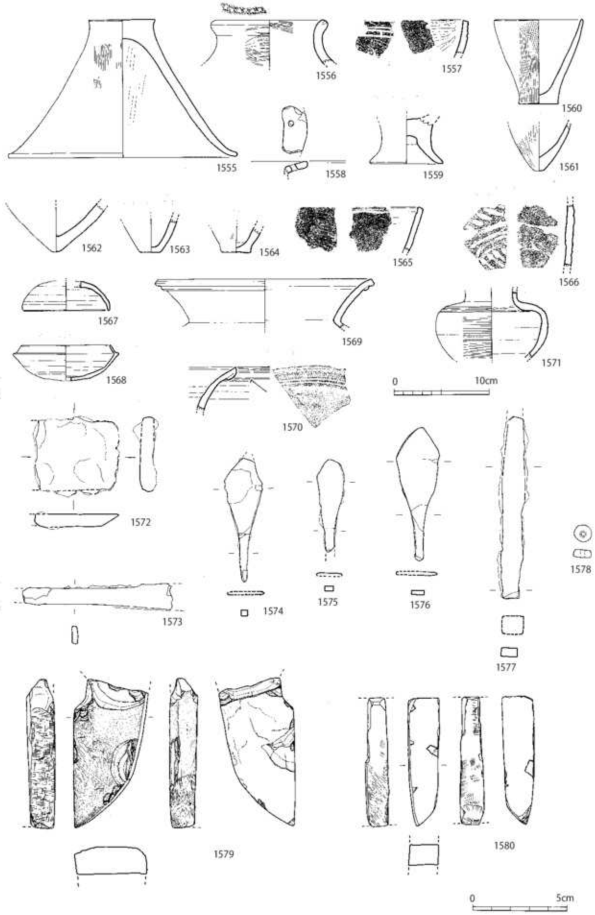
（４）まとめ

１次から７次までの調査区の中では最も南側に位置する。台地全体で見たときには、台地のほぼ中央ということになる。この調査区では主に北西部は竪穴建物、南東部は土坑という分布の偏りが見られる。竪穴建物は後期、土

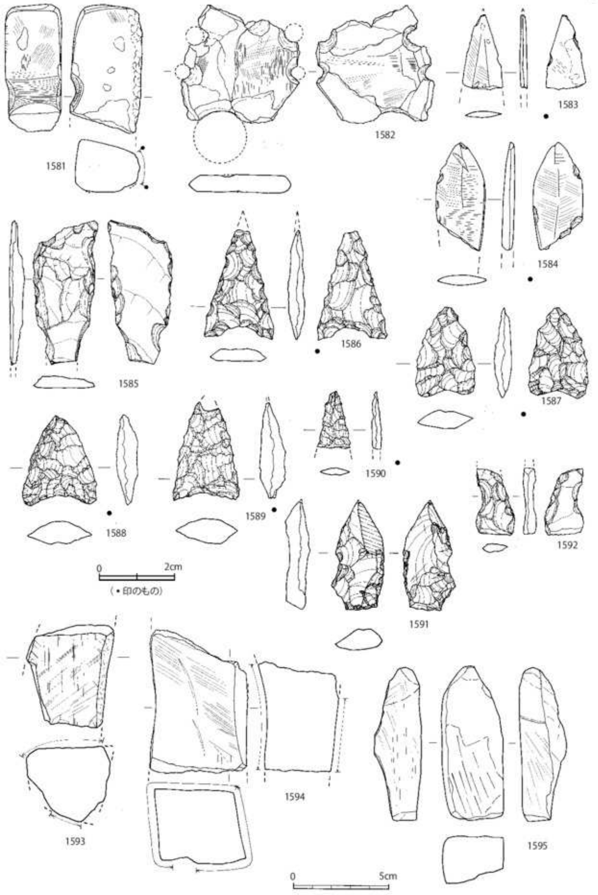
坑は中期が中心なので、同時存在というわけではないが、何らかの規制が働いていたと考えられるのではなかろうか。特に、土坑群はサークル状を呈しており、大分市下郡遺跡などで検出されているものと同様の形状を呈する。また、後期の竪穴建物にとって、この場所が何らかの規制の働いた場所であるとすれば、それは１号竪穴建物を切って掘られている溝の存在が作用した可能性がある。台地全体で見れば、台地を南北に分けるように台地のほぼ中央を東西に延びる形になる。この溝が調査区外でどのように伸びていたのかについては分からないので、これ以上確実なことは言えないが、次の章で述べる９次調査の溝との関係性もポイントになる。仮に、同一の溝ということになると、溝で囲まれた台地南側と、溝を持たない可能性の高い北側という集落を二分する装置であった可能性もでてくる。日田市小迫辻原遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて環濠が順を追って３か所築かれたが、環濠の内側だけでなく、外側にも竪穴建物が作られていた。このことは、環濠内部に住む人々と、環濠内部に入れない人々との格差が生じていたことを示すが、小迫辻原遺跡では、その後隣接地に居館が成立し、突出した特定個人の出現を跡付けることができている。雄城台遺跡の場合は、調査区が台地平坦面全体の１割程度であるため、残念ながら、これ以上言及ができない。



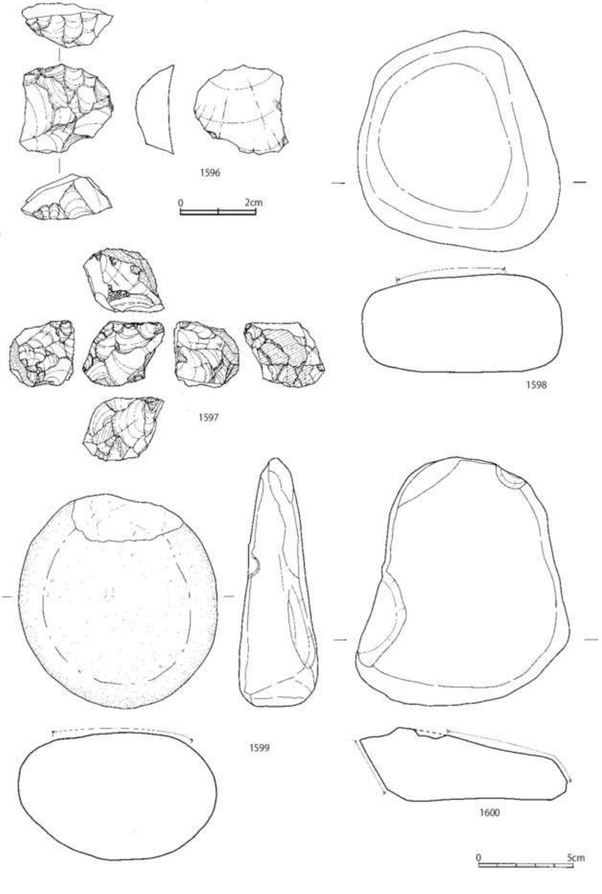
第 336 図　７次一括遺物①



第 337 図　７次一括遺物②



第338図　７次一括遺物③



第 339 図　７次一括遺物④

第 340 図　7 次一括遺物⑤